

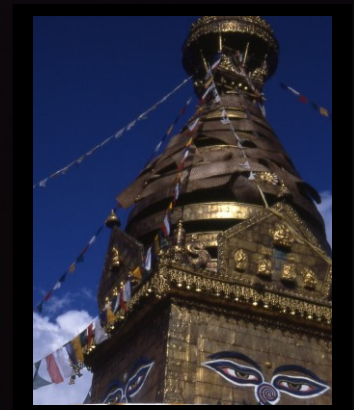


先真文明時代 への覚書

木俣美樹男



2019



自然文化誌研究会 植物と人々の博物館

先真文明時代への覚書

目次

はじめに

第1章 科学の変節

1. 遺伝子支配への不服従
2. 現代の野蛮
3. 素のままの美しい暮らし
4. まとめ

文献

第2章

1. 人間として生きた神仏
2. 世界の周期
3. 便利に抗う復元力

文献

第3章 生き方、暮らしの経済

1. 新生代第四紀、人類進化の現代史
2. 暮らしの経済
3. 末世カリユグの先へ
4. 1948年のこと
5. 職業ではない仕事
6. 幸福な暮らし
7. 若者に何を残す

文献

第4章 文明の野蛮へ退行

はじめに

1. 人間の未来について50年前に考えた
2. 失われる未来に残る希望
3. 商業主義の蔓延
4. 旅の人と呼ばれて
5. この醜くい国一親切の対義語とは何か
6. 個人主義 — 自由と幸福を求めて
7. パンドーラーの壺 — 希望を探して

文献

ヨハネは、神の言葉とイエス・キリストの証し、すなわち、自分の見たすべてのことを証した。この予言の言葉を朗読する人と、これを聞いて、中に記されたことを守る人たちとは幸いである。

時が迫っているからである。

(ヨハネの黙示録、序文と挨拶)

この書物の予言の言葉を、秘密にしておいてはいけない。

時が迫っているからである。

不正を行う者には、なお不正を行わせ、汚れた者は、なお汚れるままにしておけ。

正しい者には、なお正しいことを行わせ、

聖なる者は、なお聖なる者とならせよ。

(ヨハネの黙示録、キリストの再臨)

はじめに

私は名古屋の東海教会の幼稚園、マリア様のもとで1年を過ごした。10代のころには、将来の人生を神に祈ったこともある。しかし、キリスト教徒ではなく、聖書は教養としていくらか読んだことがあるだけである。最近、旅行しているヨーロッパ各国の首都の大聖堂、田舎の教会の聖堂を訪ねては、その荘厳さに圧倒され、人々の信仰の篤さに心を温められてきた。調査研究旅行の際に、インドやネパールではブッダガヤーをはじめ、ヒンドゥ寺院やラマ寺院、タイでは仏教寺院を数多く訪ねた。日本の寺院も数多く訪れてきたし、年ごとの正月には深大寺に初詣に行っている。しかし、仏教徒でもない。パキスタンや中央アジアの国々を旅行した時には、イスラムのモスクやミナレットを訪れた。教養としてコーランも少しは読んだが、イスラム教徒ではない。インドの友人からあなたは何を信仰しているのかと聞かれた。初めのうちは、日本人だから仏教徒かと勝手に思い込んでくださったので、自己の信仰について深く考えもせず、そのまま否定もせず、微笑んで答えを濁していた。しかしながら、とても親しくなると、曖昧なままにすることができなくなった。私の信仰は自然（カミガミ）であると思い至り、アニミストであると、答えることにした。インドの親しい友人は納得して、その後、太陽を信仰する人々の村への調査に付き添ってくれた。デカン高原の奥深い村で、アワを栽培していたムンダ族の人々は私を温かく迎え、同じ信仰をもつものとして受け入れてくれた。また、北海道でも、アイヌ族の友人は私をピリカアイヌと認めてくれた。

ジャン・クリストフは生死にかかわる人生の節目ごとに、神と対話する機会に恵まれた（ロマン・ローラン 1912、『ジャン・リストフ』）。私はキリスト教徒ではなく、ましてや畏れ多くも、ヨハネのように神から選ばれ、聖書の黙示録を書き記すことを命じられた使徒ではない。私は自己を科学者として鍛えてもきたが、何はともあれ、一人の生き物としては、できる限りカミ殺しには加担したくない。もちろん、私は地祇のご許可もなく、自然のカミガミの負託も受けてはいない。しかし、近代以降の科学技術の発展に伴う過剰な自然開発という天神地祇、八百万のカミガミの「居ます場」を破壊する機械社会文明による、カミ殺しの所業の事実について、見るに見かねて、自分勝手に見聞したことを書き記

し、生き物の文明への希望を託すための黙示録とすることにした。

地球規模の気候変動、人口の爆発、資源・エネルギーの枯渇、全球化した商業主義、巨大国際企業、金融経済、過度の便利さ・欲望、職業の衰微・失業、生活の格差、などなど、現代文明は生き物としての人間を否定する方向に傾いている。人間とその歴史を否定するような現代文明はいらない。近代に獲得された文化的進化である自由主義、民主主義、個人主義を損なうことに同意できない。人種・民族差別や宗教対立を克服しようとしてきた意思を萎えさせない。今世紀中に現代文明は、その文化的進化を定着させて、生き物の文明、新たな真文明へと徐々に変容(転換 Transition)せねばならない。現代文明の終焉の中で、新たな文明を準備する先真文明時代があるとすると、今がその時代である。

第1章 科学の変節

科学は、個人の好奇心に導かれ、事物・事象の謎を解き、現象を明らかに説明する。だから科学は面白く、自己満足し、自足できる。このことは、芸術や哲学と何ら変わることなく、本質は個人の心の充足であり、成長でもある。科学は事実に基づき、批判的精神によって、中世社会の蒙を啓いた。科学の発見を基に、科学を応用した技術が発達した。技術は産業を発展させ、人々の暮らしを便利にした。しかしその後、現代の巨大化し続けた産業は、世界に羽ばたき製品を世界に売りさばくようになった。産業は商品開発のため、いっそう技術の発達を要求し、技術はそれに応えるために、科学を従わせるようになった。個人の楽しみであった科学は巨額な資金援助により巨大科学と称して産業に従属し、企業のものになった。人々は便利さに魅惑され、宣伝情報により欲望を限りなく募らせて、本来、個人の楽しみであった科学の面白さから離れて、産業に科学を売り渡してしまった。現代科学は悪しき似非宗教になり、数値は似非教義となり、人々は批判的精神を失い、猜疑心に満たされていった。

1. 遺伝子支配への不服従

『利己的遺伝子』(ドーキンス 1994)を初めて読んだときには、まえがきに、「われわれは生存機械—遺伝子という名の利己的な分子を保存するべく盲目的にプログラムされたロボット機械なのだ。オーソドックスなネオダーウイニズムの論理的な発展である。進化において重要なのは、個体ないし遺伝子の利益であり、種ないし集団の利益ではない、などとあった。機械論や還元論の最たるものと考え、反感を先入させてしまったので、有機体論や全体論の立場をとりたい私は遺伝子 gene にすべてを支配されているのではなく、私は利己的遺伝子に不服従であると思い決めた。ダーウィン主義そのものというより、今西錦司の影響を受けてきたので、変わるべくして変わる群淘汰にもひかれていたからである。population を遺伝学では集団、生態学では個体群と訳すが、実際にも同義的ではないようだ。ドーキンスは、「進化において重要なのは、個体(ないし遺伝子)の利益ではなくて、種(ないし集団)の利益」だというのは誤った仮定であり、「歯も爪も血まみれの自然」の中で自然淘汰を受け、「成功した遺伝子に期待される特質でもっとも重要なのは無情な利己主義である」と述べている。

悪意や敵意に満ちたこの絶望的な世界で、他者の悪意に対して憎しみを抱いたという私的経験によって、私の性善説は揺らいだ。それでも、不特定の人々に対しての善意や好意はあるのだろうか。どうしたら、善意や好意に基づく行為が醸成されるのだろうか。この

ような過酷な文明の現状を憂え、真文明への過渡を考えるにあたって、『利己的遺伝子』を再読することにしたのである。ドーキンスは注意深く論を進めている。先入観を制御してよく読みなおすと、数多くの示唆に満ちていた。私は日本人として育ち、生きてきたとしても、欧米の近代市民社会の自由主義、民主主義、個人主義を信条としているので、この点からは、ドーキンスのダーウィン主義、個体（遺伝子）淘汰には論理の一貫性があると考えられる。次に、さらに、少し長くはなるが、訳文の一部を要約的に引用しておきたい。

「常に非常な利己主義という遺伝子の法にもとづいた人間社会というものは、生きていくうえで大変いやな社会であるにちがいない。それが真実であることに変わりはない。我々が利己的に生まれついている以上、われわれは寛大さと利他主義を教えることを試みてみようではないか。遺伝子の意図をくつがえすチャンス、すなわち他の種にさきがけて望んだことのないものをつかめるかもしれないのだから。われわれはかならずしも一生涯遺伝子に従うよう強制されているわけではない。あらゆる動物の中でただ一つ、人間は文化によって、すなわち学習され、伝承された影響によって、支配されている。遺伝子は人体を作りあげていくのを間接的に支配しており、そしてその影響は厳密に一方通行である。すなわち獲得形質は遺伝しない。生涯にどれほど多くの知識や知恵を得ようとも、遺伝的な手だてによってよってはその一つたりとも子供たちには伝わらない。人間をめぐる特異性は、「文化」という一つの言葉にほぼ要約できる。基本的には保守的でありながら、ある種の進化を生じうる点で、文化的伝達は遺伝的伝達と類似している。新登場の自己複製子にも名前が必要だ。文化伝達の単位、あるいは模倣の単位という概念を伝える名詞である【ミーム meme】。私欲のない利他主義は、自然界には安住の地のない、そして世界の全史を通じてかつて存在したためしのないものである。しかし、われわれには、この支配者にはむかう力がある。この地上で、唯一われわれだけが、利己的な自己複製子たち【gene と meme】の専制支配に反逆できるのである。」

さて、ドーキンスが言うように、われわれは利己的な複製子たちを制御して、この社会で真に利他的な善意と好意をもって、自律的な人生を過ごすことができるのだろうか。現在、欧米の市民社会でさえも民族や宗教などの違いによる猜疑心という「恐竜」および、さらに恐ろしく利己的な「大怪獣」である「産業技術と金融経済」にとらわれている。つまり、民族や宗教も重要な文化、利己的な複製子 meme であり、神のもとに「利他性」を自律制御できず、「利己性」にとらわれすぎれば、絶えざる民族間と宗教間の紛争、人々の日々の暮らしを食らう「恐竜」になってしまう。他方で、多様な meme である産業技術と金融経済は、グローバル化、商業化によって「大怪獣」を育ててしまった。政治は現実の駆け引きであり、利己性がむき出しになるが、優れて洗練された政治は利他性による双方の妥協、共存、共生にある。生き物たちが日々の営みに戻れるように、真文明を構築するために、市民、個人は歴史を学び、未来を良くする構想をよく話し合い、描いていく必要がある。

2. 現代の野蛮

「科学主義の独裁と文化の危機」という副題で、アンリ（1987）は『野蛮』を書いて、科学 meme が巨大化した現代科学による野蛮な状況を警告している。まずは、論点を要約しておこう。

科学の爆発と人間の破滅。これこそ新しい野蛮であり、その克服が可能かどうか、今度ばかりは定かではない。野蛮は始まりなのではない。野蛮は、ひとつの貧困化、あるいは一つの退廃として現れうる。すべての文化は生の文化である。文化とは生の自己変革、それによって生がより高い実現と成就の段階へと達するために、あるいは自ら成長していくために、絶えず自己自身を変革して

いく運動を意味する。精神の世界が、その法則やそれ自体の創造とともに、自然のうえに、あるいは人間や動物の身体性のうえに安らうものであるように思われれば思われるほど、この自然は抽象的諸観念によって作り上げられた科学の世界とはまったく異なるものだ、ということがわかる。科学は文化と何の関わりも持たない。それゆえ、科学の発展は文化の発展となんの関係もない。極言すれば、科学的知が異常に発達した結果、その過程の終局には文化そのものの滅亡もありうる。恐ろしい野蛮が出現し、今日、人類を死に追い込もうとしているのである。

本質的には美的である世界が、美の命じるところに従わなくなるのである。そして、このような状況が、まさに科学の野蛮である。感受性においては、すべては一なるものとして存在する。この場合、一ということが意味するのは統一のことであり、したがって他のすべてのものとの関係のことである。技術とは、科学と科学に固有の理論の知によって可能となる操作や加工の総体のことである。しかし不幸にも、技術であれ科学であれ、それらはそういう人類の優れた利益についてはまったく何も知りえないのであり、そういうものを顧みることすらないのである。現代技術のこの怪物のごとき発展のただなかに、さらにまた新たな手口— 原子核分裂や遺伝子操作などの技術— が登場し、科学者の良心に問題を提起するようなことがあったとしても、この問題はともすると時代錯誤だとして一笑に付されてしまうだろう。なぜならば、科学にとって存在する唯一の实在においては、問題も良心もないからである。野蛮が社会全体を徐々に腐らせているために、本来の概念に合致する大学が長らえることがまったく不可能になっているような社会においては、同じ原理が同じひとつの社会のいたるところで働いている。大学の目的は、教育において知を伝達し、研究においてそれを増し加えることである。社会と大学は互いに異なる二つの本質であるばかりではなく、全く異質で相容れず、全面的に衝突し、永遠に戦うしかないような闘争である。この野蛮によって始まるような社会においては、もし大学が教育や修練や研究の場として、生の自己発展と自己成長の諸過程の全体を総合するものであるとするならば、そういう大学にとっての場所などどこにもない。

この要約的引用から、私はアンリに共感することがとても多い。欧米人であれ、私たちと同様に、公正に現代の状況を観察して、正直に記述している人々がいる。科学知への過剰な信仰が、多くの野蛮を生んできたこと、薬害、公害（化学物質、放射線、排気ガスなど）、遺伝子組み換え、無人兵器、仮想現実、などなどすでに限りがないし、さらに大怪獣による被害は増大することであろう。それなのに、大学が無力に等しいばかりか、むしろ野蛮に手を貸していることに、私も絶望していたのである。大学紛争に参加した学生として、大学人として人生をかけて抵抗の努力をした。しかし、いかほどの成果をも示すことはできなかったが、生きている限りは、まだ希望を示すように試みたい。絶望のかなたにこそ、新たな文明を準備するために、生の限り努力を傾けている大学人は少なからずおり、彼らから励まされているからである。産業技術による便利さに心身をゆだねて、思考を停止してはいけない。自由に学ぶことから逃げてはいけない。そうしなければ、利己的な複製子たちに支配され、他者を思いやるという教養が身につかない。教養を高めるように努めないと、私たちは野蛮に陥る。

誠実な大学人として水俣病の調査研究に人生を過ごした原田（1972、2006）もその一人で、彼に対しては強い畏敬の念をもってきた。私は大学院生のころ、水俣病患者の支援のための大学行動委員会に加わっていたからでもある。原田（1972）は正直な心情を吐露し、次のように書いている。

私たちの医学が、人間を、ひとつの動くあるいは労働する機械としてみてきた、いいかえれば人

間＝労働力としてみてきた歴史のせいであろう。こうした人間観を、医学者自身が変革しなくてはならないのではないか。この考えは、現在あるいは十分に支持されないかもしれないが、水俣病裁判の中で、そのような主張をした人間がいたことは歴史にささやかに残ると思う。これは病気ではない。殺人です。犯罪です。とでも叫びたくなるような衝動に何回もかられたが、やるせない怒りをどこかで冷却しなければならなかった。冷静さを失い、感情的になることが、医師としての公正さを欠くとみなされることを恐れた。しかし、このような場合、一体医師としては怒ることも許されないであろうか。患者と一緒に怒ったり、泣いたりすることが学者として失格であるなら、学者でなくたっていいとさえ思った。水俣病の実験的研究はしても、臨床的研究には手を出さなという教訓が医学部の中では公然といわれ、臨床的研究は、あれは研究ではなく社会運動か県庁のする仕事だともいわれている。しかし、学園紛争の中で、大学が地域社会から遊離していることを反省したのは、口先だけのことにすぎなかったのか。水俣病は人類が経験した環境汚染としては史上最初にして最大級のものであるが、放射能汚染もまた、汚染のメカニズム、規模においては異なるが、人類が初めて経験した巨大な環境汚染とっていい。この人類初の巨大な環境汚染の結末こそ人類の未来を象徴する。そして、その結末、人類の未来は私たち現代に生きるものの手にゆだねられている。

市民の直感であれ、研究者の直観であれ、新たな産業技術に対して危険を察知するのなら、保留すべきである。危険であるというデータがないから安全であり、進めてよいということにはならない。データがないなら保留するということが科学的態度であろう。たとえば、科学者が遺伝子操作の安全性の検討のために、自発的な実験中止（モラトリアム、1974年）を行ったのはよい事例である。保留は危険に対して予防的に働く、統合知の態度であり、実に科学的態度にも合致するのではないのか。安全性の観点から予防するのでなければ、他方で、科学はいつも災害の後追いになる。危険が現実になって、データが取れて、それを考察すれば科学的というのなら、あまりに非理知的、退行的ではないのか。これが水俣病の被害を拡大したし、現在は福島の放射線被害を拡大する恐れがある。

絶望の暗闇の中で、希望の微光を探る努力をした原田（2006）は、水俣病に関わった40余年の総括と現場からの学問の捉え直しとして、後に続く若い人へのメッセージとして、水俣学を提唱した。「地域の大学として地域の問題を真正面に据えて、どう研究し、教育し、伝承し、地域にどう還元していくかという試みの一つである。環境汚染の最大の被害者は自然の中に自然と共に生活している人々、自然に対する依存度が高い人々である。彼らはしばしば少数派であり、社会的にも弱い立場の人々である。」さらに付け加えて、原田（2006）は、「水俣病の原因究明の過程で、残念ながら、多くの在京の高名な学者たちがさまざまな異論、反論を出して企業を支援したが、学問は誰のためにするのか、研究者の倫理を問いたい。唯一、実態と事実は現場にしかない。したがって、現場を大切に、現場から学ぶ学問を目指す。ローカルな問題を真摯に取り組んでくると、それは必ずグローバルな問題に連結している。」と述べている。

なぜ、私たちは水俣病の苦難から学ぼうとしないのか。現在、福島の原子力発電所崩壊による公害が水俣病の被害が拡大するのと同じ経過をたどりつつあるように、私には思えてならない。企業は被害状況の事実を隠し、状況が悪化して隠し切れなくなると、後出しで公表する。中央・地方行政も、責任を明確にとらない。そうこうしているうちに、公害の被害は拡大するばかりだ。現地の実態と事実の認識から始めないと、問題解決には進めない。福島県周辺や三陸地方の住民の苦難を少しでも早く軽減するために、中央・地方

行政府は今からでも東京オリンピックの開催を辞退し、被災住民の生活保障を第一にし、優先的に行政予算を投入して、人為・自然災害の復興に邁進すべきだ。とりわけ福島原子力発電所崩壊に関わる放射性物質への対応策が緊急な課題である。

このように、私がなすべきことは、利己的な複製子たちに自律制御を加えて、正直な見解を述べることである。西村（2006）は原田（2006）とは異なる視点から、「科学者から見た水俣病研究：自然科学者と文化系との間の深い溝」について、次のように論じている。

文科系の学問と自然科学の間には同じ日本語を使いながら、まったく理解不能に近い溝がある。つまり文科系学問と自然科学は、相互にほとんど理解不能な二つの文化と見なしてよいのかもしれない。実体知識は自分で体を動かして作業し、体に刻みつけなければ得られないものであって、書齋人にはないものだ。科学者がスコラ学者と違う点は、書齋人でありながら手職人でもある点である。科学の特長は議論が定量的であることだ。そのため議論は議論の核心は数学記号を用いた計算とその結果をあらわすグラフになる。これに実体を表現する写真や略図が科学情報の主部である。言葉はこれを説明するための補助手段である。科学者とは意見の違いでの論争を好まない人種である。結局、科学の精神は一切の神の否定に帰結せざるを得ない。ここに科学が敵視される深い根拠がある。神をもつ人にとっては、神への帰依、献身、原罪意識が倫理になるが、神を否定する科学者にとっては、これらすべてを否定することが倫理になる。倫理性の最後の証は、どれだけ自分の生命を、職を、生活を危険にさらしたかだ。絶対安全な発言は言論としての倫理性はゼロである。大学などある程度安定した地位にいて社会問題と歴史を研究できる者が、身の危険ばかりを恐るあまり、一番やらなければならない研究をまったく放棄していたのでは、倫理性が問われる。

西村（2006）の科学論は、自然科学者の立場としては、まったく伶俐で、単純明快である。しかし、彼の信じる科学は本来の科学であって、私も自然科学者としてここまではおおよそ同意する。しかし、現代の科学は、本来の科学とは大きな違いがあり、技術、産業、さらに金融と強く結びつき、少しもファンタジーが入り込む要素はない。冷酷な現実を仮想の衣装で覆い隠しているようなものである。また、彼は文科系の水俣病研究者を、患者を神聖視しているのではないかと強く批判している。その根拠は、1）水俣以上の惨劇が第2次世界大戦中にいくつも起こったこと、2）水俣病は2度と起こらないので、思考をステレオタイプにすることを避けたい、3）患者・研究対象の神格化が、研究者自身の神格化に通じ、研究者の倫理感覚を鈍らせる、である。このように要約の前段と後段では明らかに論調が違う。後段における論調は一変して感情的になり、現実の倫理性の問題に焦点化される。彼の倫理性についての義憤は、第2次世界大戦に伴う惨事、とりわけ彼自身がこうむった満州での辛い経験、しかし、戦争責任者は敗戦後に何ら責任を取らなかったこと、さらに、水俣病と自動車排ガス研究をしたがために他大学に追われそうになり、水俣病研究を中止するという条件で追放を免れたこと、などによるものである。伶俐な自然科学者であるはずが、彼自身の個人史をよみがえらせし、その義憤が人間味を帯びて正直に、はからずも吐露されてしまったようだ。

か弱い一研究者が倫理性を意識し、良心を貫くのは、自ら観察した事実に基づき、論理を組み立てて、自説を論じることにある。利己性を越えて事実を明かすことは利他的・博愛的な行為であり、事と次第によっては「焚書坑儒」の目に合う。現代市民社会における文化的進化の成果である自由主義、民主主義、個人主義にあつて、暗殺されないまでも、社会的に黙殺されることは往々にしてある。私は、黙殺までは忍耐するが、生命や生活をかけてまで抵抗するつもりはない。日本の場合、これまでの歴史を見てくると、同僚など

身近な人たちによって、まず黙殺され、排除される。大学組織でさえも同じく保身的である。市民が自ら学び、自ら社会を動かそうとしない限り、つまり市民が個人として行為の判断をしない限り、私は大衆的な選択に迎合はせず、その裏切りの犠牲になる気はない。自由を失うという、閾値を超えて辛い状況になる前に、私は生き物として身を守るために「三猿」になるつもりだ。このような社会状況が訪れないように、今こそ、学び、考え、発言をしているのである。

3. 素のままの美しい暮らし

重い義務と責任を伴う大学教授という職業を定年退職して、いわゆる無職になった。給料がないということがすなわち無職ということである。この歳まで、土曜日曜も働き、年休もほとんどとらなかった。自然科学者としてのトレーニングを受け、自らピペットを握り、実験研究も定年退職の年月日が迫るまで継続してきた。環境教育学を創業するために、専門家から教養人になるようにも務めてきた。義務仕事を越えて、人の倍以上は働いてきたので、若者の職をいつまでも奪わないで、これからは年金生活者としてつつましく暮らしてよいと考えている。そうはいつても、もともと研究を趣味ととらえてきたので、職業教授でなくなっても、生涯、研究という仕事はなくなるならない。長年続けてきたボランティア仕事もやめない。やっと、自分と家族のために、日常を暮らす家事や自給農耕を取り戻したのである。素のままの美しい暮らし (sobibo) に近づくことができそうである。多数買い込んだ読みたい本も、心おきなく読むことができる。

素のままの美しい暮らし (sobibo) を提唱してきたが、『素朴への回帰— 国から「くに」へ』(河原 2000) には、私ととても近い考え方が一層丁寧に描かれていて、多くの示唆を得ることができる。特に、国とくにのありかたを複眼で見て、国(中央)とくに(地方)における行政策が俯瞰的に立案されるよう望んできた。何もかも単眼、単線的な行政策ではなく、多様な手法が同時にとられてよい。くにの自律的な行政策が、国の俯瞰的行政策の中に位置づけられてよい。私の行政策の師、高木文雄はそう考えて、財団法人森とむらの会を創ったのだと思う。森とむらの会では、私的な利害にとらわれない、大所高所からの行政策提言をしてきた。私は教養人になるために、高木の弟子として、実践的に行政策の立案資料づくりのための調査研究に携わってきた。このため、多くの官僚や政治家とも知遇を得る機会があった。

さて、要約的引用をまずしておこう。日本の政治思想史を専攻した河原(2000)は次のように記述している。

彫琢して朴に復える(莊子、應帝王篇第七)。現代人は物的、精神的にすきまなく人為、虚構、人工の環境にとりまかれ、時に天然、自然の生活に憧れても、もはや帰るべき道すら探しあぐねているのではないのか。現代教育が想定した期待される人間像がある。科学的で、合理的で、何よりも権威が正しいとする解答に従順に適応するような人間像である。知識の習得〔注：本当は単に伝達に過ぎない〕を至上のものとする現代教育は、このような素朴さ、生きた実感を嫌って、極力それを排除しようとする。ここには、ひたすら精密な彫琢を事とし、素朴を評価しない現代文明のあり方が浮き彫りにされていた。阪神淡路大震災の時に、神戸市で、犬たちは大阪方面に逃げたが、人間は神戸市の中心部へと逃げた。人間が危険な方に吸い寄せられていったのは、人工的環境と技術的構成物に囲まれて暮らしているうちに、本能的、直観的な判断力を退化させたのであろう。アトラント・オリンピック以降の露骨な商業主義は健全な身体も精神も壊している。素朴への回帰は、身近な所での願望や希求に支えられている。現代人はどこかで現代世界を支配する彫琢への限りない

定向進化の趨勢に歯止めをかけ、朴に復る道を探らなければならない。素朴と洗練は一見あい反するように見えて、しかし両者はあいまって一つの文化の構成要素となる。シラーが素朴に与えた定義は、自然であること、自由であることであった。ルソーのみならず一切の学問や思想は、素朴への情熱を欠いては未来に生きるものとならない。それにしても現代の極限にまで達した技術至上主義文明は、あえて無理を承知で革命だの素朴への回帰などを掲げなければならないところに至っている。活力とは道義的な自己抑制力であるが、意地・気概・反骨・覇気の類が消滅してゆくことは活力低下の初歩的徴候である。科学・技術への絶大な信頼の念は、利便・快適・有用性についての信頼であり、科学のみが人間を神に近づけてゆくことができるからである。人間は果たして神になりうるのか。

河原（2000）は以上の本文に、新しい「くに」への誘いを付記している。要約しておこう。

人口2・3万人程度の小さいくに（共和国）。新しい人間は知情意の三要素の統合体として存在し、単純・素朴を身にしみて生かす。天職は神のため天のため、万人のために奉仕する仕事である。食糧不足・栄養不良の問題は豊かな国の援助、人々の利他心や同情で解決できない。食糧危機や環境破壊もバイオテクノロジーによって解決するというのは見事な科学・技術信仰に他ならない。第2次世界大戦後、自国の農業を痛めつけてきた日本で、農業への回帰が一種の理想と見なされている。農業という言葉はもはや止揚して、生きていくための生業としてとらえる。食糧は万人に必要であるので、共働を基本とした地業として誰もが農園に関わる。素朴さ、特に児童の発育と教育にとっての素朴な環境は守らなければならない。ゲーテ最後の結論は「自由な土地に自由な民の住むのが見たい」であった。人々が協力して働くところに自由がある。将来のくにについての形はほとんど示されていない。この未来図を考えることは、人に自己の宇宙観・世界観・歴史観・人生観のすべてを動員することを求める。くに（「扶桑こく」：こくは口の中に民）は日本国の領域内の見捨てられた過疎地域に樹立、「和を以て貴しとなす」、「政道無私」、「萬人直耕」、一職二人制・月番交代制、ワークシェアリング方式、専守防衛・65歳以上徴兵制、鎖国の権利」などの提案がなされている。ここで言う「鎖国はグローバリゼーションの中で自国が倫理的に許容できないものを選択し拒否する意思のことである。

私は国立大学に職を得ていたものとして、単に一教授で、しかも民族植物学者であったにすぎないのだが、国（国民）ないしくに（市民）のあり方について、調査研究し、考え、ささやかな提言はしてきた。全球化した現代の中で、地域主義や自治を求める河原（2006）の提言に対して共感するところが多い。しかしながら、国際社会の政治や経済の過酷さ、ヨーロッパでさえも野蛮な戦争をいまだに悪意をもって作り出していることを見るにつけて、残念ながら、くには国とのかかわりを維持して構想せざるを得ないを考える。国の助成にできる限り頼らず、地域自治に気概を持って、自律内発的に発展させることは現実に可能なことではないのか。エコミュージアムやトランジション・タウンの活動はまさにこれである。「改革」はその場限り、犠牲の多かった「前の革命」ではなく、しかし、実のある「次の革命」は志を保って、ゆっくり準備しながら、天の時の到来を待つことに賛成である。専守防衛・65歳以上徴兵制は、『風の谷のナウシカ』に従軍した老兵たちの気概に示されている。TPP（環太平洋連携協定）に、強く反対している論客、鈴木宣弘（2014）も、講演で、「今だけ、金だけ、自分だけを行動原理にするのではなく、組織のリーダーは残された生涯の時間を、我が身を犠牲にする気概を持って、全責任を背負う覚悟を明確に表明

し、実行すべきではないのか。責任回避と保身ばかりを考え、見返りを求めて生きていく人生に意味はあるのか」と同様の趣旨を述べている。身を守ることは基本的な生活技能ではあるが、他者を傷つけてまで保身しかないのは悲しい。利己的複製子たちに支配され、自律的な人生を生きているとは言えない。保身と保守は明確に異なる。私はあえて言うなら、原日本人志向の保守底流である。だから、くにを持続可能な地域社会として再生したい。

第2次世界大戦に伴う惨事、とりわけ彼自らがこうむった満州での辛い経験、しかし、戦争責任者は敗戦後に何ら責任を取らず、そのまま高い地位にしがみついたことに対する著しい義憤（西村 2006）、要するに、為政者は現代史を語らず、責任を曖昧に回避し、他方、市民は自ら学ぼうとせず、知らないことにして、両者ともに事実に基づく責任措置を先送りしてきたことで、被害者は黙殺され、将来に再び同じ過ちを繰り返させる。次には、自分が被害者になっているに違いない。

第2次世界大戦後、南アジアでも植民地の独立に際して、悲惨な争いが起こった。1945年8月15日の日本の敗戦に関わって、その2年後、英領インドは1947年8月15日に独立した。この時期を前後して、インド・パキスタンの分割時の惨劇は目を覆いたいほどのことで、突然引かれた新国境を挟んで約200万人が殺されたと推定されている。『インド現代史 1947-2007』（グハ 2007）に詳細な分析がある。植民地支配の残滓、宗教・民族・カーストやイデオロギー間の対立、大国の思惑などが複雑に絡み合って、インド・パキスタンの分割、さらにはバングラディシュ分離、チベットの併合（約120万人が死亡）などへと展開していった。政治は非情である。モーハンダース・カラムチャンド・ガンディーやジャワハルラール・ネルーが人々の犠牲を避けようとした優れた政治家であっても、毛沢東や周恩来はにこやかな笑顔に隠れた老練な政治家であった。旧東欧、ウクライナ、中東、パレスティナ、チベット、新疆ウイグル、アフリカ各地などでは、断続的に戦争が今現在も起こっている。人類の文化的進化は、まだ、紛争の話し合い解決の手法を十分に確立できていない。一人の命の重さを考えれば、数100万人という死者数は想像さえつかない現実である。

現代史は評価が確定しないから学ばない、および伝えないというのは、無知により同じ不幸な結末をもたらす。現代を個人の視点で学び、考えればよい。個人や事象の歴史的評価は誰による評価なのか。権力を獲得した者たちの評価（正史）なのか、市民の実態評価（個人史）なのか。正史はあまりにご都合主義の一方的な歴史評価なのではないのか。これを西村（2006）が怒っているのである。第2次世界大戦をめぐる日本の現代史も、これに関わるインドの悲惨な現代史から、多くのことが学び取れる。当時の日本軍は、チャンドラ・ボースと協力して、英領インドを開放するとの名目で、インパール作戦などを行った。これらから学びとらなければ、新たな悲惨を伴う現代史を、幸せな解決へと導く手立ては見出せない。日々、世知辛い現実を見れば、利己的な複製子は利他的な行為に優位であり、生存する確率が高いと考えられる。しかし、利己と利己は衝突せずにはいられず、常に闘争に明け暮れることになる。世界の悲惨に伴う憎悪の連鎖、利己的な複製子たちの自縄自縛から逃れることができない。

4. まとめ

環境学との位置関係において、現代科学の現状を深く反省してみよう。現代文明が危険な崖淵、退化の閾値を超えたからは、今、心して背水の陣で行動を起こさねばならない。

ただし、決して急ぐことなく、早く始めて、ゆっくり着実に確認しながら、良い方向に変えていくのである。利己的複製子たちに逆らい、共存・共生への文化的進化をさらに促していこう。利己的な悪意、過剰な金銭、権力や名声への欲望などを自ら制御して、自律して善意を志そう。美しい自然の景色、美しい絵画の色使い・音楽の旋律、人は善意に対して他者から善意で応答されて大きな喜びを見いだす。現代を、生き物の文明＝真文明へのトランジションの時代ととらえよう。素のままの美しい暮らしに復るためには、山村の伝統的な生活技能を学ぶとよい。私たちが帰るべき道は、まだ、今なら見つかる。自然や歴史、芸術や思想、伝統的知識から人生を自分で学び、考え、選びさえすればよいのである。

引用文献

- ドーキンス, R. 1989、日高敏隆・岸由二・羽田節子・垂水雄二訳 1991、『利己的遺伝子—増補改題「生物＝生存機械論」』、紀伊国屋書店、東京、548pp.
- グハ, R. 2007、佐藤宏訳 2012、インド現代史 1947—2007 上巻、明石書店、東京、643pp.
- 原田正純 2006、水俣病五〇年の負の遺産と水俣学、環— 歴史・環境・文明 25: 273—284、藤原書店、東京。
- 原田正純 1972、水俣病、岩波書店、東京、244pp.
- アンリ, M. 1987、山形順洋・望月太郎訳 1990、『野蛮— 科学主義の独裁と文化の危機』、法政大学出版局、東京、284pp.
- 河原宏 2000、『素朴への回帰 — 国から「くに」へ』、人文書院、京都、219pp.
- 西村肇 2006、科学者から見た水俣病研究：自然科学者と文化系との間の深い溝、環— 歴史・環境・文明 25: 254—271、藤原書店、東京。
- 鈴木宣弘 2014、日本農業を取り巻く国際情勢— TPP、日中韓 FTA と 6 次産業化、講演要旨、東京大学、24pp.

第2章 末世カリユグの先へ

メル・ギブソン主演の映画『パトリオット』を久しぶりに見た。戦争は人間を野獣以下の異常な残虐行為に走らせる。効率の良い兵法や武器による兵士の殺し合いさえもおぞましいのに、非戦闘員である婦女子、市民をも無差別に虐殺する。石やナイフで殺されるのも苦痛だが、無人機に木端微塵にされ、水素爆弾に塵のように消滅させられるのは、あまりに無神論的であり、唯物論的である。機械に殺されるのはあまりにおぞましく、とても嫌だ。人間の歴史に戦争は不可避だと信じている人は多いし、これまでの歴史は戦争を中心に語られることが多かった。しかし、これからは改めて自律する個人として、身近な地域社会(くに)の歴史を発掘することから、戦争を回避する先真文明時代のあり方を探り、非暴力、不殺生の真文明に向けた一層の文化的共生進化を勧めるべきだ。これから非暴力、不殺生の市民自治の政治によって、「自由、平等、友愛」を保証する、素のままの美しい暮らしができる真文明の創り方を探り、これを迎える用意をしておきたいものだ。

アレクシエーヴィチ(1985)の『ボタン穴からみた戦争—白ロシアの子供たちの証言』に記述されている多くの子供たちの戦争体験、不条理な惨害に会いながら、辛うじて生き延びた個人の歴史証言は当時の実生活を中心に語られている。この記録なくして、人間の歴史は統合されえない。彼女は言う、「過去を忘れてしまう人は悪を生みます、そして悪意以外の何者も生み出しません。…地上で一番すばらしい人たちは子供たちです。不安に満ちた二十世紀に子供たちをどう守ってやったらいいのでしょうか？その心や命をどう守ってやったらいいのでしょうか？その子供たちばかりでなく、私たちの過去や未来を？…人々の住むこの惑星をどうやって守ったらいいのでしょうか？…子ども時代を二度と再び「戦争中」と呼ばないために」と。

1. 人間として生きた神仏

ジーザス・クライストやゴータマ・シッダルタ、物語のラーマ神王(ヴィシュヌ神の化身)も、皆、ともに神仏でありながら、人間としての苦難の人生を勇敢に送り、個人として生死の後、復活ないし転生した。内村鑑三(1946)が言うように、「思想のこの世の中に実行されたものが事業」が、すなわち個人の人生における自由を達成する努力の結果としての、「後世への最大遺物」とするのなら、解脱とはこのことかとも思った。絶望の末世を人間として精一杯生死し、それでも、再び廻り来る真文明の時代に希望の光を見いだすことが解脱なのだろうか。悟りと解脱は異なった事象であり、悟りは生きているうちにあるかもしれないが、解脱は死に際するまでないのだろうか。

解脱とは、「束縛から離脱して自由になること。現世の苦悩から解放されて絶対自由の境地に達すること。また、到達されるべき究極の境地、涅槃」とある(広辞苑)。それでは、自由とは何か、「一般的には、責任をもって何かをすることに障害(束縛・強制など)がないこと。自由は一定の前提条件の上で成立しているから、無条件的な絶対的自由は人間にはない。自由は、障害となる条件の除去・緩和によって拡大するから目的のために自然的・社会的条件を変革することは自由の増大である。この意味での自由は、自然・社会の法則の認識を通じて実現される。ア社会的自由。イ意志の自由。ウ倫理的自由」(広辞苑)。この語義を重ねてみると、絶対自由が人間にないのなら、解脱は死の際までないということになる。広辞苑では、「ウ倫理的自由」に関してさらに説明し、「カントにおいては、意志が感性的欲望に束縛されず、理性的な道徳命令に服することで、自律と同義。サルトルにお

いては、人間は存在構造上自由であり、したがって常に未来の選択へと強いられており、それ故自由は重荷となる」と追記している。

私は元国家公務員・国立大学教授として、俗世間で遠慮した日々を過ごした後、今は無職になって、大方の義務をなくし、個人の責任に基づく自由が増した。フロム（1941）は『自由からの逃走』の序文において、「すなわち近代人は、個人に安定をあたえると同時にかれを束縛していた前個人的社会の絆からは自由になったが、個人的自我の実現、すなわち個人の知的な、感情的な、また感覚的な諸能力の表現という積極的な意味における自由は、まだ獲得していないということである。自由は近代人に独立と合理性とをあたえたが、一方個人を孤独におとし入れ、そのため個人を不安な無力なものにした。この孤独はたえがたいものである。かれは自由の重荷からのがれて新しい依存と従属を求めるか、あるいは人間の独自性と個性とにもとづいた積極的な自由の完全な実現に進むかの二者択一に迫られる。なぜなら、全体主義がなぜ自由から逃避しようとするのかを理解することが、全体主義的な力を征服しようとするすべての行為の前提であるから」と述べている。

フロムの分析からすれば、近代人は自由から逃走し、解脱を希求し、努力しようとしないうだ。これが全体主義の拡大を後押しし、フロムは第二次世界大戦下、ナチズムのドイツを追われた。ヒトの文化的進化は、少なくとも、ある状況での相対自由は求めてきた。フランス革命のめざした自由・平等・友愛には文化的進化として歴史的な意味がある。自由と平等は個人主義を支え、平等と友愛はトランス・パーソナルに向かう。この先に何をいかに創造するかが、一層の文化的、共生的進化なのであろう。

外面の物質・技術の便利さから内面の精神の自由、心の豊饒さに向かう変化の意思が解脱への入り口なのだろうか。囚われない絶対自由が解脱か。しかし、家族・友人らに囚われるのも、やはり自由なのだろう。囚われないのが絶対自由なら、やはり解脱は死に際して後にしかないのかもしれない。すべて無に帰す死には、何もない暗黒、家族のことも、自分の意思もないのだろう。だから、そこに至るまでに、最大遺物を整理しておく。

科学者、技術者や医者が神の手、スポーツ選手や職人が神業などと讃えられ、企業人、官僚や政治家が昇り詰めたと賞賛され、このように人間が増長しているこの時代は、『もののけ姫』（宮崎駿 1997）に出てくるアシタカが言う「カミ殺し」の時だ。神々さえも人間（応現神）として死生したのに、人間が現人神を名乗ることはありえないことだ。個人や集団の技能や技術を褒め称えることはとても良いことだが、「神」のみ名を冠する「神業、神の手」などというのは末世の驕り高ぶった思い上がりで、信仰心の喪失だ。

シューマッハ・カレッジの J. ドーソンの講義でのプログラムを受けた。相対する他者にひたすら語り、聞いてもらう。他者は聞くだけ、その後、話し手と聞き手が交代し、同じようにする。これはまさにトランス・パーソナルな統合する学習手法だ。これには4段階あり、2~3分ほどで一方向的に語り、話題が展開できなければ沈黙する。私は、知人もおらず、高みの見物を決め込んでいたが、親切な方がパートナーを申し出てくださった。そこで、次のようなことを聞いていただいた。

1) 課題について：今、「来るべき文明」について考えている。2) 負荷を負い、難渋している者の視点から：世界に飢えた人々が沢山いるのに、日本人は食べ物を粗末にして、大量の生ゴミを出している。3) 他の生き物種の立場から：食べられる側にある植物は、人間と栽培する契約を結んで、共進化したのに、人間は生命を尊重していない。在来品種を一方向的に捨て去り、GMO植物を作って隷属化している。生命を奪っておきながら、美味しく料理して食べないで、ごみにしている。4) これから生まれる赤子の立場から：生命

を大事にしないのは精神が崩壊していることだ。子どもの未来に希望があることを示しておくべきだ。

2. 世界の周期

1) 4つの時代ユグ yuga

歴史の終焉、終末をどう超えていくのか。末法思想、仏教もヒンドゥ教も、現世は悪がみちて、滅亡に向かうと言っている。キリスト教も最後の審判に備えよとしている。ユグ第4時代における、人間の自堕落への警鐘だと思う。しかし、警鐘や警告を超えた信じるべき予言だとしたら、第四期の後には再び第一期が来るのであろう。廻り来る真文明時代、ラーマヤン（ラーマヤナ）に描かれているような、来る新たな第一期に備えて、人間は何を準備したらよいのだろうか。

4つの時代ユグとは、ラーマヤンから摘要すると、次のように述べてある。

カラス仙人ブシュンディは、正法がすたれて悪法がはびこる末世の諸相を、なおも熱っぽく説きつづける。師は弟子から財貨を奪い取ることしか考えません。弟子の悩みにはけっして応えてやろうとはしません。心が貪欲に縛りつけられ、魂が常に地獄の底を這いずり回っているからです。両親が子どもたちに教えることと言ったら、どうすればたらふく食べられるかという、目先のことばかりです。末世に幅をきかせるのは、金品の力です。人倫道徳を標榜するものは枚挙にいとまがなくても、真の人格者は絶無です。末世には、天災、地変、飢饉が再々訪れます。穀物がとれず、多くの人々が悲しみのうちに飢えて死にます。得体のしれない疾患が、多くの人々を苦しめます。安寧幸福などという社会は、どこを探しても見あたりません。心に、自足、平安、理性を保つものは皆無です。賤種貴種を問わず、誰もが平気で物乞いをします。嫉妬、憎悪、罵詈、強欲、不正がわがもの顔にはびこります。平等観は枯渇し、差別と別離と孤独の悲しみで、人々は死に瀕します。末世には悪事が充満しますが、一つだけ偉大な功德があります。末世に生を受けた者は、労することなく生死の苦縛から解放されることです。真理の時代サッチャユグ、神々の時代ツレタユグ、形式模倣の時代ドアパルユグにおいては、祭祀、祈禱、苦行の積み重ねで辛うじて得られる解脱位が、末世カリユグにはただ神のみ名を唱えるだけで安易に得られるのです。

宇宙の第一期であるサッチャユグに生きる者は、一人残らず聖者、悟者であります。主神ハリ様〔注：ヴィシュヌ神〕を念じながら、一切生類は洩れなく生死の苦海を渡って彼岸に到ります。第二期のツレタユグに住む人々は、一心に行学に励み、いっさいの煩惱を主神に全てを託しながら生死の苦海を渡してもらいます。第三期のドアパルユグに生きる人々は、ラーム様のみ足を一心に礼拝しつつ、苦海を乗り越えるのです。そのほかには、いかなる行法もありません。さて、宇宙の第四期末世カリユグについて説明します。この時代には、ただ単に主神ハリ様のご功業の物語を歌い讃えるだけで、生きとし生けるものはみな楽々と、苦海を渡ることができるのです。末世には梵行、祈禱、悟道は絶え果てます。純粋な信仰心があれば、末世にまさる恵み豊かな、祝福された時代はないのです。

汚れない純質、平等観、大覚悟道、無情の法悦があまねく満ちわたるとき、これが宇宙の第一期、真理の時代サッチャユグの特徴とお心得ください。全体として生類が日常の営為を大切に、慎み深く平和に暮らすのが、第二期ツレタユグの特徴です。大衆の心に喜悅と恐怖が交錯するのが、第三期ドアパルユグの特徴です。四方八方、敵意、害念、怨嗟に包まれ、だれもが恐怖と苦痛にさいなまれて片時も心休まるときがないのが、末世カリユグの際立つ特徴です。

『ラーマヤン』を翻訳した池田運（2002）は序で次のように語っている。

〔注：この古典文学書〕が、どうしてわが国ではあまり顧みられないのか、それが不思議でなりません。その理由を考えると江戸時代の鎖国、明治初期にはじまった廃仏毀釈、文明開化に伴う欧米文化の偏重とアジア蔑視の風潮などが、まず頭に浮かびます。ラーム王生誕は、悪魔を含むすべての生類に解脱を与えて、大宇宙の根本原理ブランムと合一させることを終局の目的とします。ラーム王は、ラームラジャという理想の王国を建設して、殺生、差別、疾病、悲愁、苦悩などのない至福の楽園を地上に現出させ、劫が尽きたあと眷属一同をひきつれて神の国へと還ります。まさしく万民融和、五穀豊穰、息災延命、極楽往生をもたらす、日本人好みのめでたい福の神と言えます。ガンジーが目指した理想の国も、このラームラジャにはほかならなかったのです。

こうしてみると、末世カリユグはとてつらい時代だからこそ、純粋な信仰心さえあれば、修行をしなくても解脱できるようである。こうは言われても、過剰に大欲を煽られ、拝金、名利に取りつかれ、物品に囲まれて便利に暮らす、現世の孤独地獄の中では、純粋な信仰心に到ることは、とても容易なことではない。ひたすら、「南無阿弥陀仏、南無妙法蓮華経」あるいはラーム神王を崇めることで、解脱できると説かれれば、安心できるのかもしれない。

2) 末法思想

末法思想とは、釈迦が説いた正しい教えが世で行われ修行して悟る人がいる正法の時代（お釈迦様がこの世におられた後千年）が過ぎると、次に教えが行われても外見だけが修行者に似るだけで悟る人がいない像法の時代（さらに千年）が来て、さらにその後、人も世も最悪となり正法がまったく行われない末法の時代（その後の一万年）が来るとする歴史の見方を言うようだ。

上述の末世カリユグに相当すると考えられる。正法がやがて衰えるとの考え方は修行者への訓戒であったと説かれているようだが、戦乱や自然災害など、現実の悲惨さが目を覆うほどになると、「末世」観は逃れがたく、インドや中国では末法思想に強くとらわれる人々もあった。同様に、日本における末法の時代の始まりは、武士が台頭し、戦乱が続くようになった11世紀頃で、民衆の不安も高まり、鎌倉仏教が信仰の新境地を開いていった。

浄土宗の開祖法然は南無阿弥陀仏と称え、「阿弥陀仏にどうか私を救って下さい」と願う事（他力本願）で阿弥陀仏に極楽浄土へ導かれると説いたという。法然の弟子で浄土真宗の開祖、親鸞は個人の心境として、「善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」とおっしゃっている（歎異抄）。彼の教えでは、御仏様が救済したいのは、煩惱具足の衆生（凡夫、悪人）であり、他力の信心をえない疑心自力の作善の人（善人）ではない。聖教の学問は内に向けられるべきものであって、外に誇るべきものではない。そして、その内に向かって知られた喜びは、また他に伝えられるべきであろう、と述べておられて、とても共感する。私は40年間、大学に勤めて、知識と経験の伝達に誠実に努めたが、学生の皆さんに教えることなど、意思の上でも、能力的にもとても及ばなかった。本来、教え、教えられる関係ではなく、学びたい人が自ら学ぶ（自力）ことにささやかな共学、共助することが、私の役割だと思った。

とても共鳴する言葉は、「親鸞は弟子一人も持たずにさふらふ。弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなり」。確かに、信仰も学問も、個人の思惟であり、生き方であり、弟子はいるはずがない。弟子からすると、道を外れないために、

良い師は必要であるが、道を学ぶ者には弟子はいない。一人一人が、内発的に意思を深め、信仰にたどり着くものなのだろう。深く自省して、凡人（悪人）であることを知ること、本質的に、信仰は個人の内に深く広がる。このことはトルストイの思索に合致していると理解した。煩惱具足の凡人が世の中を良くしたいと作善（自力）に勤しみ、末期の際になって、自力が及ばず、他力（自然あるいは神仏）に依るまで、解脱はないと思いついた。私は信仰も個人主義的に存立し、ひとえに私の生死（人生）における解脱のためであると考えてみた。

3) 最後の審判

現代社会が複雑さを増し、価値観や信念が激しくブラウン運動をしている、このカリユグの末世の時代に、歴史には終わりがあるという終末論を超え、複雑性を受容する多様性豊かな真文明の時代への希望を探したい。

恐らくキリスト（人であった神）の意に反して、権力者はキリストを磔刑にした。他方で、キリスト教の名のもとに、多くの衆生（とりわけ異教徒）の命を失政と戦争で奪ってきたし、今も奪っている。2000年余り続いてきた、この歴史の終末期に、個人と人間（*Homo sapiens*）はどのような「最後の審判」を受けるのだろうか。幼稚園の1年間をマリア様のもとで過ごしたのみの私はキリスト教徒ではなく、神の怒りと救済に関する諸教派の論議を統合的に理解することは到底ながら不可能である。

不十分な理解を承知であえて論を進めよう。「最後の審判」については各宗教において詳細には緒論あるが、おおよそ、最後の審判の日には天変地異（ハルマゲドン）が起こり、人間は神、鬼神に裁かれ、悪人はすべて滅び、善人は救われる終末を啓示しているようである。このような歴史には終わりがあるという終末論は、天災や人災で社会が著しく不安定な時代に、神仏や来世に救済を求める考え方である。「最後の審判」、「末法思想」、「カリユグ」などはその考えに沿ったものであるが、反対に、キリスト教でも仏教でも、キリストの磔刑によってすでに人間は贖罪されたとか、末法の世においてこそ救いがあるとの異論がある。

それでは、来世とはどのような時空なのであろうか。仏教宗派により異なるが、天道界や地獄界に転生するとの解釈もあれば、浄土や六道に行く、あるいは現世こそが浄土で、今を活かせるとの教えもある。単に死後の世界との意もある。キリスト教での天国と地獄、イスラム教では信教を貫いた人間が永遠の生を得る天国に行く。このような信仰は科学的な思考からは帰結しにくい、人間は信仰により行動規範を得ることができるのも考えられるので、個人の信仰には深い敬意をもちたい。

フクシマ（1992）は『歴史の終わり』の「世界史に下される最後の審判」と題した項において、「ヘーゲルに立ち返ることが重要なもう一つの理由は、ヘーゲルの歴史観が、人類の歴史発展は無限に続いていくのか、それともわれわれはもうすでに歴史の終点に達してしまったのかという問題を考えるための枠組みを与えてくれるからである。現在の社会的・政治的組織の形態が人間の本質的な性情を矛盾のひとつかけらもないほど満足させているとすれば、歴史はすでに終わりを迎えていると論じても差し支えないのである。歴史主義の立場に立つ哲学者は、リベラルな民主主義が最高かつ最終的存在であると認めるだろう。かくして世界史が最後の審判を下すことになる。重要なのは世界史の全過程を通じて生き残ってきた、たった一つの体制ないしはシステムを認めることなのだ。そして、人間の欲望をいかにして満たすかという、人類誕生以来の問題を解決する能力があるかどうか、

また、人類を取り巻く環境の変化に適応し存続していく能力があるかどうかという点が、ここでの判断の基準となる」と記述している。

私は、歴史に終わりはなく、末世カリユグの後に、新たな第一時代サツチャユグが再び廻り来るといった真文明への希望、人間の文化的な適応進化が続くとの立場をとりたい。循環する第一時代が真文明の時代とするのなら、この来世を迎えるために、現世の私たちは何を準備したらよいのだろうか。一つの糸口として、科学技術に過剰に依存、換言すれば隷従してまで求めた便利 convenience への欲望を適正に制御して、不便さを楽しむ豊かな暮らしが復元力 resilience を回復するように高めて、移行過程 transition を経て希望の端緒となるのだろうと考え始めている。

3. 便利に抗う復元力

物語に「おわり」はあるのだろうか。いつまでも白昼の時代を求めながら、実際にはとうに昼下がりを過ぎていた。黄昏へと向かう最後のあがきのような残照が照り付けている。これは歴史の終わりのことなのだろうか。改めて、私が思うに、黄昏の時代カリユグはゆったりと暮れなずみ、暖かな家路へと向かうように、平穏な市民社会への移行が望まれるのではないのだろうか。

自然選択は適者生存とも言い換えられる。適者生存は必然に、偶然が加わり、かなり中立的な概念でもある。しかし、大方はこれを弱肉強食と解釈して、強者の権謀術数が弱者を支配する世界と誤解させる。社会ダーウィニズムによる解釈としての弱肉強食ではなく、生態系の中での食物連鎖であり、自然の歴史であり、現在の見かけの強弱によるものではない。権力（権威）には主に5種類がある。これらは政治、軍事、金銭、宗教、科学であり、昼下がりの現世での強い力はなお名利を求めて争うことによって勝ち取られる。露わな悪意をぶつけ合う争いは人々を「虚無」へと向かわせながら、「虚無」に目をふさぎ、忘れるように、出来合いの「便利」が機能する。人々は自ら生きる苦楽よりも、与えられる娯楽に心身を委ねる。自由からの逃走である。

一方で、相互扶助をとらえて、自由、平等、友愛につなげようとする少数者（着実に増えてはいる）の理解もある。過剰な名利を求めのを自律して、不公正な競争から程よく身を引けば、自然（じねん）、素のままの美しい暮らしに近づける。黄昏の時代は穏やかに泥みゆっくり流れ、連続的に、満天の星空を見上げながら、再び陽が昇る新しい朝を迎えるだろう。人々の希望はここにある。

しかし、今は便利コンビニエンスが世界を襲っている。何もかも計算機、無人機械が代行する。グローバル化を喜んで、国際コングロマリット、大企業から、中間組織、チェーン店に心身を委ねていると、過去や未来をも消されて、どんどん人でなしになってしまう。人間は精神性を見失い、意志薄弱となり、AI 機械に隷属する。便利な外部装置に依存し過ぎることによって、身体的能力、生物としての能力を著しく低下させる。心の構造と機能も、隷属的に順応していく。これはヒトとして退行進化の段階に入ったことになる。多くの人々は進化が前に進む良いことと妄信しているようだが、生物の歴史を学べばわかるように、ハイパーモルフォシスから、袋小路的過剰な定向進化、結局、種としての滅びの道に向かったこともあった。

古来、真善美を求道した人々や偉人たちの多くは時の権力者に無残に殺され、また、死を命ぜられてきた。現代には、殺さない自由、殺されない自由があると社会的に堅固な合意を形成したい。殺傷は美しいものではない。とても痛い、惨たらしい。傷は元に戻らな

いし、生き返ることはない。実際の外傷は、心にも癒えない傷を負わずと、高橋和己(1971)は書いていたような気がする。はたして、ゲームの世界で、バーチャルに妖怪や怪獣を、人々をモニターの中の戦場で殺傷することは、心身にどのような影響力をもつものか。心の暗闇を溶解する代償行為の範囲に止めてほしい。悪意を善意に変えることは容易ではなく、暗闇を公明正大に向かわせるのは困難な作業で、この社会をよくするための歴史に終わりはないのだろう。より善き思いに向かって絶え間なくゆっくりと文化を洗練することだ。

自然への畏敬、食べ物への感謝を失った現代文明の増上慢。より多くを奪い合うのではなく、より善くなるように競い合うことだ。人を羨まず、自分を卑下せず、自分そのものを素心に生きる。自分の暮らしをほどほどの快適さに自律制御する。すなわち、足るを知る、知足。欲望を自律制御せずに、過剰な便利に押し流され、自失しないことである。過剰な便利さを自律しなければ、自らの限度をもって部分拒否しなければ、便利に隷従する。便利に抗う生活の復元力は、伝統的な生活技術の継承により、保持される。意思的に不便を求めて、暮らしの技術や技能を忘れないように磨く必要がある。

個人の直接体験、冒険・探検をバーチャルに求めるのではなく、危険を伴う現実を経験すべきである。失敗を繰り返してこそ、技能も知恵も身に付き、自らがすべてを完結させる達成感、生きる楽しみ、これらが実感としてある。身体的傷害を負わない、死なずに、生き返るゲームの世界ではない。冒険を少しもしない人生は、虚無の下にある。新たな機会と人との出会いを求めて旅に出てみよう。便利に抗い、人生を遅しく、楽しく過ごすための再ルネサンス、人として生きる復元力はまだ獲得できる。

文献

- アレクシエーヴィッチ, S. 1985 (三浦みどり訳)、ボタン穴から見た戦争—白ロシアの子供たちの証言、群像社、横浜、pp. 302.
- フクシマ, F. 1992 (渡部昇一訳)、歴史の終わり (上)、三笠書房、東京、pp. 332.
- 長谷川明 1987、インド神話入門、新潮社、東京、pp. 120.
- 金子太栄 校注、1991、歎異抄、岩波書店、東京、pp. 94.
- 木俣美樹男 2014、『先真文明時代』への覚書、民族植物学ノオト 7 : 29-37.
- 宮崎駿 1997、もののけ姫 (上・下)、徳間書店、東京。
- 高橋和己 1971、黄昏の橋、筑摩書房、東京。
- ツルシダース (池田運訳 2003)、ラーマヤン —ラーマ神王行伝の湖、講談社出版サービスセンター、東京、pp. 1021.
- 内村鑑三 1946、後世への最大遺物・デンマーク国の話、岩波書店、東京、pp. 142.

* 用語法を確認するために、ウキペディアで下記の項目を参照した。

終末論、来世、最後の審判、ヨハネの黙示録、末法思想、悪人正機、ハルマゲドン、天国。

第3章 生き方、暮らしの経済

現世カリユグの時代は、何でもあり便利な世の中だから、特別の修業をしなくても、ふつうの生き方をしていることが修行であり、覚醒を得るといふ。あらゆる誘惑の中で、ふつうに自律して暮らすだけでも至難の業ということなのだろう。

マイナンバーなどという個体識別番号が政府によって勝手に割り振られ、日々の暮らしに忍び込んできた。個人の自由や民主主義を管理する悪意が隠されている。私個人は微細な識別管理されるのはお断りだ。個人情報に誤って入力され、改ざんされ、当人の知らない個体が作られてしまう。科学的ファシズムというものだろう。マイナンバーを要求されるのなら、印税も原稿料も辞退することにした。書きたいことを書く売らない作家が良い。名利はいらない。保険や年金は勝手にマイナンバーが登録されている。できるだけ個人として抵抗しておきたい。社会が濫みに陥ったら、個人が流れていくしかないだろう。自由や民主主義、友愛は個人の内にいる。

シンポジウムの参加費について話し合った。市民活動の原則は、個人が同じように持ち寄った経費や労力で、対等に役割を担うことである。若者に学割、収入が少ない方々に割引はあっても良い。しかし、費用も労力も全く出さないなら、対等な関係ではなくなる。費用や労力を出してまで学びたくないという人々もいる。自由と学びから逃走して、衆愚を決め込んでいては、不幸と悲惨は万人や万物、生きとし生けるものに及ぶ。

原則は、税金を支払っているのだから、税金は社会すべての人々の幸福のために用いるのが条理だ。しかし、えてして税金は行政府や大企業の意図によって「私的に」操作される。市民は税金や行政に頼らない資金、会費や任意の寄付によって社会的共通資本を構築するのが良い。助成金や補助金がなくても、市民活動は自立して行えるように心がけるべきだ。

私たちは誇りに生きたい。私たちは社会人、職業人として義務を全うし、市民としての責任を担い、個人、家族、地域社会、民族、すべての人々、生き物の幸せに関わるものだ。

1. 新生代第四紀、人類進化の現代史

自然物は適応進化を一時も止めはしない。この先真文明時代の中で、移行の順応を続けてきた。完新世末期の消費文明の中にも、自然物は適応して、新たなニッチを求めてきている。山から、シカ、サル、クマ、イノシシ、野生動物が人里に降りて山民の農作物を奪い、街に出没して都市民を襲う。彼らばかりではない。巨大都市と大陸間交通の文明に順応して、カやゴキブリから病原菌まで世界中の都市にも移動して潜伏、定着増殖している。自然は非情だが、公正である。自然現象に備えなければ人々も家族を守れないし、野生と戦わなければ共存も共生もありえない。しかし、多くの人々は都市生活によって現実の自然を見失って畏怖心を脱落し、実物の食材や生活資材などの自然資源の生物多様性を活用する知識・技能も忘却しつつあるのではないのか。

人類の場合は意思ある選択が文化的進化によってある程度でき、野生獣のようにひたすら自然選択されるばかりではない。心の構造を発達させた人類の個体として、どのように人生を送るか、日々の暮らしをどのように成り立たせるのか。日々の人生を自律的に楽しく、幸せにするために、自然から生物文化多様性を学び、活かし、個人や家族の暮らしの経済を見直す必要がある。

たとえば、稲作単一民族説（柳田国男）に依拠した敗戦後農業政策における稲作一辺倒

の結果は、過剰生産・減反政策の失敗、また、アメリカの食料戦略にのって、コメ食・パン食の量的逆転が起こり、十分な食糧自給をせずにグローバル経済に依存・支配されることになった。まさに過誤への誘導がなされていた。すなわち、明治維新や昭和維新以来の虚偽の政策の成果、残虐・卑劣な悪事をかくして勝てば官軍である。明治維新の偉大な成果の裏に、薩長閥政府が恣意的に隠してきた負の事実が郷土史家によって次第に明らかにされてきた。不都合な事実を消去した正史だけに拠らず、郷土史による自由な学びから何が歴史事実かを見極め、恐怖や虚偽によって操られた暗い人生を三度選ばないようにしよう。

2. 暮らしの経済

家族や地域社会を守るためには、市民の自律的な経済活動を創らなければならない。まず、小規模自給農耕を勧めたい。暮らしの自律、特に家族食料の安全保障を確実にするために、家族農耕、市民支援農業 CSA、市民農園、コミュニティ・ガーデン、ファーマーズマーケットなどを展開する必要がある。都市・田舎を問わず、目に余る耕作放棄地を活用しなければ、農家も非農家も幸福にはならない。自ら土を耕しながら自然と向き合い、学び、自然素材を用いて自ら多くの物事を創作することは達成感が深く楽しい。パーマカルチャー、トランジションを進めよう。人生は素のまま美しく暮らす (sobibo) ものだ。つつまじやか、簡素でもよいではないか。心から共感する友人はすでにかなりおり、世界中のいろいろな場所で暮らしている。交流は個人、家族、友人、地域社会から、民族、国も越えて世界まで広がっている。市民の側の望ましいグローバル化だ。

反面で、グローバル企業による種子生産販売、大規模農業による食糧、あるいは金融経済、エネルギーの寡占的支配も苛烈になっている。アメリカの農業食糧戦略や緑の革命の成果によって、日本を含む先進諸国の食の変化（栄養過多、とくに肉食の増大）が現代の病気を拡大してきたことは、マクガバン・レポートやチャイナ・スタディなどで明らかになっている。さらに、地球環境問題（大量生産・消費・廃棄、環境汚染、気候変動）、自然災害（台風、地震、津波、噴火）、人為災害（原子力利用による放射性物質、自然界になかった化学物質、遺伝子組み換え化け物、限りなく続く戦争、差別・暴力、不公正・不正義）、あるいはマスメディア（ビッグ・データ、ITC、AI、SNA）の恒常化、蔓延で、生き方、暮らしには危険がいっぱいになった。

これらのことを深く反省して、過剰な便利を求める科学技術の使用を、個人も、人々もほどほどな便利さに選択、自己制御するべきだ。たとえば、食の在り方をもっとゆったりスローにすることだ。食の生命倫理、必要量だけ作り、生ごみの量を減らし、できる限りリサイクルする。生命への畏敬・自然信仰を尊重して、良い素材による料理を食べ、人々・野生生物から飢餓をなくするのが良い。パーマカルチャーとトランジション活動によって、食料は自分で少しでも自耕自給し、獲得する野生の原則を再確認し、暮らしの仕事、生業を取り戻す。先真文明の時代を自覚して、ゆっくり、着実に現代文明の在り方を変えていく。自然ともう一度向き合う未来の暮らしのために伝統的知識体系や技術・技能の継承は重要である。身の回りの暮らしの経済こそが、地域社会の安定をもたらす。

3. 末世カリユグの時代の先へ

しかしながら、現代は第2章に書いたように末世カリユグの時代である。日本や世界の実情を次に列記してみよう。実に末の世と言うしかないではないか。

食糧の自給率（激減、昭和 40 年カロリーベースで 73%から平成 26 年 39%）、食糧輸入量（急増、平成 17 年小麦・トウモロコシ・大豆の 85%以上、肉類 47%）、食品ロス量（平成 22 年食品廃棄物 1700 万トン、内可食部分 500~800 万トン）、農家数（急減専業平成 44 万 3 千戸）、不登校者数（増加後横ばい平成 25 年小中高校合計 175,252 人）、いじめ発生・認知件数（小中高校合計、調査法が違うから比較できないが、昭和 60 年から 10 万件前後で横ばい）、自殺者数（増加後漸減、平成 15 年 34,427 人から平成 26 年 25,427 人）、交通事故死者数（増加後減少、過去最悪昭和 45 年の 1 万 6,765 人から平成 25 年の 4,373 人）。

さらに、現代的暮らしには解決すべき不幸は無数にある。自然災害（台風、洪水、竜巻、津波、地震など）も、人為災害（公害、汚染、汚職、失業、紛争、戦争、差別、貧困、飢餓）も限りなくある。近現代の最悪事例は、M. ホワイト（2010）「人類が犯した 20 の大罪」によると、15 世紀以降でもその死者数は、大西洋奴隷貿易（15~19C、1800 万人）、ネイティブ・アメリカン撲滅（15~19C、2000 万人）、ナポレオン戦争（19C、400 万人）、太平天国の乱（19C、2000 万人）、英領インド飢餓（19C、1700 万人）、コンゴ動乱（19~20C、800 万人）、第一次世界大戦（20C、1500 万人）、ロシア内戦とスターリン粛清（20C、2900 万人）、中国内戦（20C、300 万人）、第二次世界大戦（20C、5500 万人）、毛沢東飢餓（20C、4000 万人）と、まさに想像を絶する恐ろしい惨状である。

『ラーマヤン』（ツルシダース、池田運訳 2002）では次のように言っている。このカリユグの時代には、四方八方悪事が充満し、だれもが恐怖と苦痛にさいなまれて片時も心休まるときはないが、一つだけ偉大な功德があり、それはただ神のみ名を唱えるだけで安易に解脱位が得られることである。これほどの時代だからこそ、純粋な信仰心さえあれば、苦行・修行をせずとも、解脱できるというのだと理解してみた。これは南無阿弥陀仏と唱えれば極楽浄土に導かれるという教えにも近い。

権力や権威の支配手段としての、宗教の強制が信仰を阻害する。アニミストは自然に沿った信仰だ。旧来のアニミズムに見られた黒魔術に合意はしないが、祈りの儀式には賛意をもって良いのではないのか。自然との関わりを失い、生命ある糧を頂く感謝を忘れ、尊大になることは、生き物としての人でなしだ。

人々には様々な、細々とした欲望が心の深層に蠢いている。それは善悪以前の、剥き出しの欲望である。これらの欲望の実行を制御するのは人類として順化してきた社会的行動、基盤の文化である。これは心の構造のどの部分か。剥き出しの欲望の発現は、抑制、促進ともに制御する心の構造を構成する微細部品、たとえば言えば螺子や発条、あるいは振り子や磁針、これらの緩みと緊張、歪みや捻じれによる衝動に基づく、非文化的、非社会的な異常行為である。即自・即時的に面白い、欲しいを制御できずに、行為し、自他を傷害する。便利な仮想現実のゲームは殺し合いの暗い欲望を代償するが、境界を見失った心は制御できずに行為する。真に神ならぬ身の奪われた生命は決して復活しない。退行期にある現代文明が欲望を刺激し、即自・即時的な発現を促進する、実に不審・不信の世である。

これら過剰な欲望の発現は、心の構造の発達、すなわち教養という文化的進化によって制御されるものだが、受験競争で縮んだ心の構造で、高い学歴が欲望の道具となつては、かえって教養の低下は免れなかった。

4. 1948 年のこと

私が生まれたこの年は波乱に富んでいた。K. M. ガンジーが凶弾に倒れ、J. オーウェルが

『一九八四年』を執筆し、世界人権宣言が採択された。公的歴史が消し去ろうとも、黙殺しようとも、個人史、地方史の中に、残しておきたい物事がある。残しておけば再発見されるやも知れず、内村鑑三の言う「後世への最大遺物」として、未来世代の思索に役立つかもしれない。歴大の著作のうち、そうした優れた書籍が、現代人に価値観形成の基盤を与える。古典は大事だ。アナログの本を無くしてはいけない。デジタルは改竄されるし、すぐに消し去れる。

黙っていれば、善事は掠め取られ、悪事は暴かれない。陰徳は消し去られ、虚偽がまかり通る。忘却の穴（オーウェル 1948）に放り込まれていく怒り、悲哀に悩まされ始めた。名声を求めてはいないが、個人人生をかけてなしたことが、ささやかなこととはいえ、身近な人々にとっても、忘却の穴にするりと投入されている。知足すべきだが、学問のバックグラウンドに敬意を示されないことに、不条理な悲哀を感じる。だから、地位を得た人々は権力や権威にしがみついているのだろう。でも、生涯、地位や名声に無縁の市民であったなら、そんな悲哀は感じないのだろうか。最初から諦めたのか、悟っているのだろうか。悟りを得て、ドロップアウトしたのだろうか。そんなはずはなく、志ある人々に自尊心がないわけではない。忘却の穴というのは、現代文明の基本的システムに組み込まれている。まず個人に、地域社会に、学協会や政治団体のような組織にも、結果的には大小の歴史にも穴に放り込まれた事実があまりにも多い。

個人のうちにもこの穴はある。事績を記録しておかないと、忘れたいことも忘れたくないことも、忘れてはいけないことも、何もかもこの穴が吸い込んでいく。これで楽になることもあるが、自尊心が損なわれることもある。事実がすべての基礎だ。自己の名利を得るため、人の事績を掠め取る。単純な忘却、あまりに複雑な社会なので、記憶からあふれ出る。心理的負担を減らすために忘れ去りたい。意図的に忘れることにして、無かったことにする。集団内で黙殺する。いじめの本性は意識的無意識的に機能している。身近に機能すると、神経的につらい。厭世的になり、引き籠りたくなる。

5. 職業ではない仕事

職業がたとえなくても、日々を生きるための仕事は多くある。仕事は生きるための営み、生業だ。名声や金銭を得るための職業ではない。名利がなければ生き難い社会ではあるが、無くても生きられるし、無い方が人々あるいは個人として自由・平等・友愛に生きられる。とはいえ、資本主義のこの世では相応の金銭や名利がないと、自由・平等・友愛も得られないこともある。どの程度で知足するかが個人の教養の高さだ。

名利を得れば、意見を聞いてもらえる。贅沢な暮らしができる。でも失うものやいらぬものも増える。自由を失う。世間に迎合するようになる。自分がなくなる。だから無名で好きなことをしたらよく、世間の評価、毀誉褒章を求めないのが良い。

人々の間を遊泳して名利に生きる。このような生き方を、私はもう久しくしてないし、他人の知足は思い測れないが、でも、こういう人も世のなかには必要だ。ほとんどの人が、小さなスマホの仮想世界の中で過ごしている。少し前まではテレビの中がほとんどであったが、スマホが架空・仮想、嘘世界の伝道物のアイドルになってきたようだ。

オリンピック、才能あるアスリートは素晴らしい。しかし、スポーツは万人が自ら楽しむもので、特別な才能の持ち主だけを観戦するだけのものではない。素晴らしいものを見て楽しむことと、自ら行って楽しむことは同等に、あるいはむしろ後者がより大切だ。自ら行わないで、見るだけで、同一化して仮想現実に入る便利は人々を生物的にも文化的に

も退化させる。莫大な税金を特別なことに偏重して使用するのはいくはない。文化的生活が市民に満たされることが優先されるべきだ。オリンピックは返上しても、行政機関は福島原子力発電所の対応に全力を傾けるべきだ。福島の現実はとても深刻な状況だと推測できる。

6. 幸福な暮らし

私は自然に近い場所に暮らし生きたい。植物の色香、畑の土の匂い、むらの農道、バザールの喧騒、美味しい手料理、人々の笑顔、子供たちの輝く眼差しが好きだ。

ビール造りの知人の家を訪ねた。彼はピーボ（キビの発泡酒）を醸してくださった方だ。畑のさらに奥、山間の谷津を詰めていくと、欧風の美しい家があった。周囲はイングリッシュ・ガーデンでたくさん花々とハーブが植えられていた。広い居間で、彼の醸したビールと、妻の手作りの昼食をいただいた。素材はすべて、有機無農薬の自家製野菜だ。居間の大窓は額縁のように掛かり、対岸の森を背景に、バタフライガーデンを中心に花々が展開しており、すばらしい景観を抽出している。私の好きなもののほとんどがここにあった。ご夫妻の自給知足ぶりに共感し、おもてなしに心もくつろいだ。

ボランティアとは市民が自らの意志で、自分の金、労力および時間を使って公共の仕事をする事だ。行政は市民から集めた税金で、職業として給金をもらい、公共の仕事をする。企業は客に品物やサービスを提供して、あるいは公共の仕事をして、見返りの金を受け取る。客は金を支払って、サービスを受ける。どれも必要なことではあるが、心持に大きな違いがある。

世界市民は、自由、平等、友愛を求める自律した個人である。この個人は伝統的には家族、民族の属性をもち、近代的には地域市民、国民の属性をもつ。ただし、現在は移民、難民、無国籍など、不幸にも困難な状態にある人々も少なくない。世界市民は個人がそうであろうと意思するものであって、各地で増加しているが、まだまだ相対的には少数かも知れない。それでも、意思して世界市民であろうとする人はいるだろう。

絶滅危惧種のように希少を尊ぶことはよし悪しである。現場に生きている、希少の当事者からすれば、なにゆえ希少に追い込まれたのか、それでも生きていることの意味が大きいことを語るべきである。希少性を良いことのように利用するノスタルジーは現場の当事者のものではない。当事者でないから同情するかのように悲壮にも美麗にも描けるのだ。

ましてや、少数民族のような社会的マイノリティの現実に敬意を払わないのは気に入らない。日本にもフンザやラダックのような場所は各地にある。これらは遅れた理想郷などではない。山間地の厳しい現実を精いっぱい暮らしているところだ。日本人は伝統的な暮らしを大切にせずに、見捨ててきた。明治維新政府が創った脱亜入欧の現代創作神話にいつまでも呪縛されたままである。東洋と西洋の美の意識の違いは、素のままの自然美と創られた人工美に見て取れる。日本人にはこのように差異認識されていることが多いのだが、人工も含めて自然美、あるいは融合を意識した自然と調和する人工美もあってよい。

7. 若者に何を残す

若者に向かって話す言葉を失ったと感じた。大人が話せば存在自体が重く（うざく）なり、彼らに沈黙を強いているのかもしれない。求められなければ話さず、思いは書くことで果たすべきであると考えようになった。大人がしでかした不始末の解決を次世代の子どもに押しつけないで、大人が解決して見せることだと、ある若者は言った。できるだけ

負の遺産を残さないように、経験を伝えたいと思うが、おおかたは余計なお世話なのかもしれない。

静かに、安心して、自然に沿って、幸せな人生を過ごす別の暮らしはある。各地の人々の幸せや不幸にも、心情を寄せる人の道だ。今の私は大人になったので、青少年のころのように、人の生き方を全否定も全肯定もしない。人が生き方を磨くには課題を見つけて、さらに良くなるためには、部分肯定と部分否定がいる。足るを知ることは最終的な解脱だが、生きているうちは部分の不足を課題として見つけては、さらに地道に改善努力を続けることだろう。

第4章 文明の野蛮へ退行

いかなる国家においても、このような正直者の数に正確に比例して、
その国家がその存在を持続するし、
あるいは持続できることをたしかめたからである。

J. ラスキン (1862)

未来なぞクソ喰らえだ。それは人間を食い荒す邪神だよ。
制度には未来がある…しかし人々に未来なんか無い。
人にあるのは希望だけだ。

I. イリイチ (1987)

はじめに

現代の野蛮について、アンリ (1987) が次のように述べている。

科学知が異常に発達した結果、その過程の終局には文化そのものの滅亡もありうる。恐ろしい野蛮が出現し、今日、人類を死に追い込もうとしているのである。本質的には美的である世界が、美の命じるところに従わなくなるのである。このような状況がまさに科学の野蛮である。今われわれの前にあるのは、実際、今まで誰も見たことがなかったことである。科学の爆発と人間の破滅。現代科学は世界を、それと知らずに、奈落に突き落とすのである。これこそ新しい野蛮であり、その克服が可能かどうか、今度ばかりは定かではない。大学は、教育において知を伝達し、研究において知を増し加える本来の目的のために、野蛮が徐々に腐らせている社会全体と全面的に衝突し、永遠に戦うしかない。人類が地球上に現れたときから、不思議な認識が人類とともにあり、そのおかげで人類は生きながらえ、さらには諸文明と諸々の精神性を循環することができたのであるが、その認識の松明をまだ手放さないならば、われわれはなお、淵の端にあって、少なくとも光の最後のきらめきを淵の中に投げかけ、そこに在る、われわれにとっての脅威、深い断絶、崩壊を暴き出すことができる。

バベルの塔 (The city and its tower) の物語では、人類はその名声を高めようとして、町と、天に達する塔を共同作業により煉瓦で作ったが、神はこれを人間の自己神化の試みとみて、以後作業のできないように言語を乱したという (山折監修 1991)。しかし、解釈はいくつかあるようで、①一般には人類が塔をつくって神に挑戦しようとしたので、神は塔を崩したとの説、②人類は新技術を用いて天まで届く塔をつくり、各地に散るのを免れようとしたので、神は降臨して言語を乱し、人類に異なる言語を話させるようにして、世界各地に散らばらせた、③人類の科学技術への過信を戒めるための物語である、などである。さらなる解釈は、④バベルの塔の完成形は人類の統合・統一、あるいは神と人との合一の象徴で、バベルの塔は崩れては再建する歴史が永遠に繰り返す (wikipedia2018.7)。まるで、現代科学の慢心に通ずる物語にも当てはまるように聞こえる。ブルーゲルの描いたバベルの塔はよく知られている (図1)。生命科学によるゲノム編集や iPS 細胞の利用、情報科学による AI (人工知能)、ビッグ・データの蓄積・利用、インターネット言語の画一化などは現代のバベルの塔の建設が完成に近づいていることを暗示しており、生物文化多様性、伝統的知識体系や少数民族言語の消滅傾向も続いているようだ。バベルの塔は崩れた後、繰り返し何度も造り直すのだそうだ。まるでシーシュポスの神話のようだが、バベルの塔は人間の営み、その積み重ねとしての文明のことではないのか。古代より幾多の

文明が崩壊し、また新たな文明が興隆を繰り返してきたことを、暗喩しているのだろうか。



図 1. ブリューゲルのバベルの塔、オーストリア、ウィーン的美術史博物館、

さらに、アンリは日本語版序文（1989、モンペリエ）において、日本について次のように述べている。「かつては、自然との直接的で、強く、深く、おそらく比類なく詩的な関係を生きていた国、さらには、自然に対する、このまったく特別な感情につちかわれて、瞑想に身を委ね、他の国に例を見ないほど遠くまで瞑想した国。この国であればこそまた、ほかのどの国にもまして、自分が一体化に向かっているその危機を、強く感じとっているにちがいない。この国が、唯一われわれを救いうるような徹底的な反省を開始するときが来たのではないか。」

アンリは、ゴッホ（1872-1890）が弟テオへの手紙に書いてくれたと同じように自然に寄り添って生きてきた、このくに日本の人々に深い信頼を寄せてくれている。私たちはその想いに応えなければなるまい。ラスキン、ゴッホ、アンリ、イリイチらに、私は共感し、素のままの美しい暮らしを求めて、現代を生き物の文明に向かう先真文明の時代と位置づけることにしたのである。この間、国内外の先達たちの沢山の著述を読んできたが、同様の考えを述べている先達は少数ながら存在していた。国内外の先達に励まされながら、心意を強くしてさらに思索を進めたい。

1. 人間の未来について 50 年前に考えた

私が大学生になったのは 50 年前の 1968 年である。この一年には世界中で現代史上の重要な出来事が相次いで起こった。たとえば、日本では東大医学部無期限ストライキ突入、東大闘争始まる。成田空港阻止三里塚闘争集会。国際反戦デーで新宿駅を学生が占拠。大気汚染防止法、騒音規制法施行。イタイイタイ病を公害病に認定、カネミ油症事件。東京都府中市で三億円強奪事件発生。小笠原諸島の日本復帰。札幌医科大学で日本初の心臓移植、などである。

アジア、中国では、文化大革命上山下郷運動。韓国、青瓦台襲撃未遂事件。北朝鮮、プエブロ号事件。ベトナム戦争でのソンミ村虐殺事件、テト攻勢。アメリカ関係では、米空軍機 B52 がグリーンランド沖に墜落、水爆 4 個が行方不明。マーティン・ルーサー・キング暗殺。アメリカの有人宇宙船アポロ 7 号打ち上げ。ヨーロッパでは、フランスで一千万人が参加したと言われるゼネラル・ストライキが発生。学生の街頭占拠と労働者のストラ

イキが一か月に渡って続発した五月革命。フランス、サハラ砂漠にて水爆実験。プラハの春始まる、ワルシャワ会談。ワルシャワ条約機構軍がチェコスロヴァキアに軍事介入（チェコ事件）、などである。

私が戸惑いながらも大学闘争の渦中に巻き込まれてから、すでに 50 年が経過したので、そろそろ当事者としての反省をせねばなるまい。まず、理学部生物学専攻生だった時に書いた拙稿「農業と人口」（木俣 1970）および「生物科学と思想性」（山口晶 1971、筆名）について再検討してみる。原文は〔生き物の文明への黙示録〕のエッセイ（<http://www.milletimplic.net/essay/futurehuman.pdf>）に転記した。おおよそ 50 年前の記述であるが、今に通ずる課題についていくつか指摘していた。

世界に余剰農産物があるのに、多くの国で飢えに苦しむ人々がいる。1970 年 7 月に人口は 36 億 3200 万人を越え（国連統計）、現在 2018 年 6 月 14 日では 74 億 7425 万人を越えている。緑の革命以降、一層、商品作物がモノカルチャーで生産され、化学肥料や農薬、エネルギーなど多投下農業で、種子も含めて、グローバル・コングロマリットに支配されるように進行している。自然生態系が単純な人工生態系に置き換えられ、生物多様性も、少数民族言語などに顕著に見られる文化多様性も著しく衰退している。

公害は無くなったのではなく、今でも大気・水質や土壌の汚染は拡大している。化学物質（農薬、医薬、食品添加物）などの汚染は減少してもいない。これらに加えて新たに放射性物質の汚染が拡大している。遺伝子組み換え生物の実用拡大も、すでに社会問題を引き起こしている。歴史状況が変わっても、生活空間の状況が改善されておらず、むしろ悪化しているこの 50 年とはそれだけの時間だったのだろうか。

テイラー（1968）が発した生物革命の暗雲はすぐそこまで押し寄せ、今までの規範を大きく揺さぶり、打ちこわし、人間の存在そのものを否定し、人間を滅ぼしさえする方向に向かっている。安閑と人類の英知を信じていてよいのか、あるいは人類の滅亡も自然理なのか。人工生態系としての人間社会と、自然生態系との激しい衝突は、自然科学を止揚して一つの哲学の中に統合させざるを得なくなるだろう。生物学における「生命とは、人間とは何か」の問いは哲学における根本命題として統合される。この統合において生物学者は重要な任務を果たさねばならない。事実を事実として記載するのみでなく、事実のもつ重みを自ら考え、また、それを大衆的に明らかにせねばならない。

私は 50 年前にそのように書いていた。1970 年に直観していた学問の統合への視点は現在の環境学や環境学習原論の思考につながっているようだ。また、「生物学と思想性」（山口 1971、木俣筆名）においては、分子生物学者の渡辺格の講義を受けて、層的自然観と科学の階層性について考察し、これを弁証法的唯物論の自然観としていた。当時 20 歳そこそこの科学者の卵であった私が弁証法的唯物論 {注 1} など理解していたとは思えないので、ちょっと背伸びして流行語を使ってみただけだったのだろう。次に要点を再録する。

巨大科学の中の個別科学として細分化を強いられ、偏狭な専門にのみとじこもり、巨大科学の前に茫然自失し、経験主義・実証主義に陥り、科学は人間性とは別のものとして、戦争や公害の元凶とさせた。生物科学の上層の人文社会科学として研究されている人間社会に生物学革命が飛躍的な、今までにない複雑な変革かまたは、人間の滅亡を要求し始めているからである。その後、テイラーが発した生物革命への警告はまともに聞き入れられもせず、今日では重大な社会問題になっている。

注 1) 弁証法的唯物論；1984 年にマルクスが提唱し、エンゲルス、ついでレーニンらが発展させた理論。従

来の唯物論が機械的であったのに対して弁証法的、ヘーゲルの弁証法が観念論的であったのに対して唯物論的であることを特質とする。根本原理としての物質的存在の優位とそれの弁証法的運動、人間的実践を媒介とするこの運動の模写としての認識を説く（広辞苑）。

純粋科学者は、科学は人間の欲求に基づいており、科学のための科学こそ至上の価値があるという。科学はすべてのものから遊離した存在であり、何ものからも自由であり、公正中立であり、唯一の信ずるに値する真実であると宗教的な神への信仰に近いものをもつのである。そして人間性の一発現としての科学が人間性を失うのである。近代から現代への科学の歴史は、戦争の歴史とともにあり、戦争によって科学が発展するんだと、戦争を科学のために都合のよいものという人々まで出るようになった。原子爆弾を研究することの思想性は、明らかに資本主義の論理・思想の下にあることを認めながらも、科学者が悪いのではなく、原子爆弾をつくった技術者やそれを使った人間が悪いのだというのはまったくの欺瞞ではないか。現代科学の思想的背景にあるのは科学技術という万能の神に対する信仰であり、これは資本主義の発展のなかで形成されたものである。

テイラーが言っているように、人間から出た科学が、今や巨大な怪物として現れてきている。彼はその恐怖の生物学革命が引き起こすだろう、あらゆる事件に対して、人間が滅亡するとの予感に対して、唯一ヒューマニズムという言葉にしか自分の立場を置けなかった。科学は人間性を増々抑圧して、ゆきつくところは人間がすべてを知り、すべてをなせるようになった時に、人間は滅びるといふ、自らつくった科学が自らを殺すところである。科学者のいくらか良心的な人々には、このことの虚無感がしのびよっている。科学の状況に対し、その信仰の幻想と虚無（自閉）に対し、大衆 {注2} は不信をいだき始めている。

羽仁五郎（1968）が言うように、新しい科学はアウシュビッツの総括より出発すべきである。

大衆を苦しめる科学、人間性の正当な発現を抑える科学に対して、人間性を解放する科学、人間の復興を求める思想・哲学に裏づけられた新しい科学を求めているのである。中国での大学闘争は非常にラディカルに展開され、今では大学は労農兵にも門戸を開き、新しい大学制度の下に、教育・科学研究・生産の結合の試みがなされている。労働者大衆こそ新しい科学を支える力であり、また担い手である。宇井純（1971）が日本の反公害住民運動の中に見ようとしたほのかな希望の光は、ここに至って輝くだろう。大衆は無知無能ではないし、大衆の手によってこそ新しい科学が発展するのだ。

この頃の私は、大学闘争の暴力的な現実を見て学生運動に失望する一方で、大衆による非暴力・不服従志向のベトナムに平和を市民連合や反公害運動に共感するなかで、大衆の参加による新たな科学になんとか希望を見いだそうとしていたようだ。しかし、中国の紅衛兵の評価は、歴史的背景とその結果を知るにつけ、今にして考えれば、あまりにもひどい錯誤であった。文化大革命の実態は、大躍進政策に失敗した毛沢東が復権を画策し、紅衛兵と呼ばれた学生運動を扇動して政敵を攻撃させる、中国共産党の権力闘争であった。マルクス主義に基づいて宗教が徹底的に否定され、教会や寺院・宗教的な文化財が破壊され、特にチベットでは仏像が溶かされたり僧侶が投獄・殺害され、その犠牲者数は数 100 万人から 1,000 万人以上ともいわれている。さらに、大躍進政策による餓死者数は 3,635 万人であったという {注3}。

注2：大衆とは民衆、特に、労働者・農民などの一般勤労階級。

注3：大躍進政策の失敗にともなう大飢饉の死者数は国家統計局データを基にすると4,770万人で、地方誌や地方の統計を集計すると5,318万人。楊氏の現地調査などでは不正常な死に方（餓死者）は3,600万人であった（Wikipedia）。

こうしてみると、科学者による純粋科学を大衆先導の応用科学に変化させるべきだと言っていた。しかし、大衆とは何か、一般的に言えば所詮、自覚する個人ではなく、無知で無恥な烏合の集団ではなかったのか。決して上から目線で言っているのではない。私は50年来、何百人という農耕民に田畑や農家で直接個別にインタビューをしてきた。自律して暮らす尊敬すべき、大勢の農耕民や都市民に国内外で出会った。大衆という不特定多数の集団概念で、その様態を見てはいけなかったのだと深く反省したい。個別に、個人的に直接出会った実態のある人々を尊敬すべきであったのだ。教養ある人々は少なからずの割合で存在するが、学びを忌避し、思考停止する大衆はあまりに多数いるのだ。

学生の頃、中国の文化大革命・毛沢東思想や北朝鮮のチュチェ思想〔注4〕は素晴らしいと賛美していたが、その後、隠されていた歴史事実を知るにつけて、無知ゆえに騙されていたのだと気づいた。これらの思想の下では、あまりに人々の命が軽く、自由・平等・友愛の近現代精神原理に大きく外れていた。いくつかの国々を旅して、現実の社会主義・共産主義は資本主義と何ら変わることなく金権から外れていなかったことを知った。この50年で、多くのことが白日の下に晒らされて、それでもなお、失政で何千万、何百万の人々を死に追いやった権力者の巨大な肖像画は大街路に飾られ、醜い権力は続いており、不幸な人々が多い世界の現実が残念だ。大衆という集団概念はポピュリズム（大衆迎合主義）そのものだ。

注4：チュチェ（主体）思想は、金日成の信念、人間が全ての事の主人であり、全てを決める、を基礎としている

一方で、アジア・太平洋戦争時の日本軍の実態を描いた吉田（2017）の著作を読んできた。次に一部を引用する。

1940年から1945年にかけて、日本軍は、満州国はもちろん、アリューシャン、ハワイ、オーストラリア、インドにまで戦域を拡大した。日中戦争以降の軍人・軍属の戦死者は約230万人（朝鮮と台湾の軍人・軍属戦死者は5万人）、このうち広義の餓死者は140万人（61%）、海没死35万8千人、日本の民間人の死者は約80万人、うち国内戦災死没者は約50万人。日本軍による略奪、虐殺、まきこまれたアジアの戦災死没者1,900万人以上。中国人に対する蔑視、刺突という残虐行為による訓練、古参兵による暴力的いじめ。恐怖・疲労・罪悪感から軍人・軍属の自殺者が多く、10万人に対して30人強で、世界の軍隊で1位であった。軍医・衛生兵は傷病兵に自殺を強い、または殺害処置した。

こうしてみると、日本軍がいかに特異・非道な軍事思想の下で、徴兵された兵士に凄惨な体験を強いたのか明らかである。国家間および国内権力者間の覇権争いで、このような生き地獄によって、人口を制御されるいわれはない。状況は異なっても何千万人を越える犠牲を強いられた戦争や飢餓の歴史を繰り返さないことだ。他面で、アメリカ軍は太平洋戦争末期に、日本の都市を絨毯爆撃、原子爆弾投下により、一般市民数十万人を不必要に殺した。敗戦したと言えども、この国はどのようにしてこの非道なアメリカ軍の所業を黙認

したのか。この絶望的な殺人所業は現在でも世界で続いていることを、忘れず、かつ知っておくことである。宇沢・内橋（2009）は、1945年の東京大空襲から広島・長崎への原爆投下に至る人類最大の犯罪の背景について、次のように解説している。

この市場原理主義的な Kill-Ratio はマクナマラ {注：ベトナム戦争時のアメリカの国防長官} が最初に考え出して、日本攻略に際して最も効果的に使われたものです。限られた航空力を最も効率的に使って、日本の都市を絨毯爆撃して、徹底的に破壊し、できるだけ数多くの家を燃やし、できるだけ数多くの人間を殺すことを日本爆撃の目的に掲げたのです。アメリカの自動車産業に日本を褒美として差し出すために道路をつくる目的で、徹底的に日本の町を爆撃して燃やしてしまったのです。木造家屋が燃えやすいような焼夷弾をわざわざ開発して。その後自動車が普及するように広い道路をつくり、その自動車も、最初は、日本では生産できないように規制を設けた。そして、日本人の考え方、生き方を、アメリカの製品・産業に順応する形につくり変えるという徹底的な教育をしたわけです。日本人の体格が貧弱なのは魚を食うからだとか、米を食べると頭が悪くなるといった類の言説。パンを食べろというのは実はアメリカの余剰農産物を消化させる意図で、非常にきめ細かい占領政策を展開した。

アジア地域への侵略に対して、日本は贖罪せねばならない。しかし、アメリカ軍の所業、ソ連軍の所業を忘れ、戦争犯罪だから仕方がないと言って許すこともない。朝鮮半島がアメリカ軍の撤退も含めて、非核化され、朝鮮族が統一されることは良いことだ。しかし、自国民・少数民族への人権蹂躪、市民拉致など、国権力が人権を踏みにじっている北朝鮮や中国の政治体制には不服従・非協力だ。アメリカ軍が朝鮮半島や日本からも撤退するのなら、その過程で日本は自立して専守自衛の論議を広く行い、主体である市民レベルでも自衛体制の準備を議論する必要がある。

私は香港返還の、その日に中国河北省石家庄の雑穀研究所にいた。返還の祝いの昼食会にも加わった。現在、その香港で自由への長期的なデモが続いている。1968年の安保反対闘争に参加した学生であった自分に、死をも覚悟している香港の学生・市民を重ねてしまう。生きていううちに1968年の経験を反省して個人史的責任を果たすために、大学論を書かねばなるまい。

論考を生物学革命に戻そう。50年前に出版された『人間に未来はあるか—爆発寸前の生物学』（G.R. テイラー1968）を再読してみた。気になる点を次に要約する。

かつては天然物としてしか手にはいらなかった物質を、今日では科学操作によって、商業的な規模で人工的に作ることができるようになったし、天然には存在しなかったものまで作り出すことができる。現在直面している問題の一部は、生物学的な知識の爆発的な膨張によって必要となってきた社会的な意思決定を、広く受け入れるような制度をつくり出さねばならないことである。われわれは自由の代価として意思決定を強いられる。機械革命は一般の人間にも新しい自由をもたらした。新しい人口移動が生じ、都市への流動を早め、そこで多くの社会問題を新しく生み出してきた。生物学革命も似たような結果を起こすであろう。生物学研究にある種の制限を課すべきかどうかは単なる学問的な問題ではない。生物学革新の速度が非常に速いと西洋文明あるいは世界文化を破壊してしまうだろうし、思慮深く規制しないと、そこから混乱した、不幸な、非生産的な社会がつくり出されてしまう。研究の範囲と方向を規制するか、研究は自由にしてその結果を凍結し、必要に応じて取り出すか、実際にはこの2方法を組み合わせる必要がある。

しかし、大衆は、問題が自分の玄関先でどしんと落とされ、大きな音を立てない限り、多くの奇妙な生物学の発展に対処して、前もって準備し始めることはないという結論を、残念ながら下さざ

るを得ない。社会が新しい技術を受け入れる準備が整うまで、凍結しておく生物学的アイス・ボックスが必要であろう。

社会の混乱には個人の混乱が強く結びつく。努力がはっきり結果に結びつかないような世界、良心ある人が不正で報いられ、利己的な人が望む物を手に入れるような世界、あるいは結果は単に偶然なものでしかないといった世界では、人間は努力する情熱を失ってしまう。今日、社会にはすでに個人的ニヒリズムの兆候が見られる。それは冷笑主義、物質主義、少ない利益でもよいかから早く手に入れることを好む風潮などに現れている。

大衆が科学に背を向ける日が近づきつつある。科学者は現代がどういう時代であるかさえも知らない。自分の理論を検証するためには地球を軌道から外し、太陽を消し去ることさえ辞さない、気違いじみた技術者であるというのである。ある社会のもついろいろの特色はすべて相互につながり合っているのであり、その一つを他から切り離して無関係に変えることはできない。環境のいろいろな特徴を、どの程度まで犠牲に供しても良いのかということが問題になっている。われわれが忙しく働いてその結果、独りかくれて自由な生活に浸り、のんびり働いたり、自然と接し、あるいは愉快地に仕事をするなどという楽しみを我々から遠ざけ、物を消費することだけを増々容易にするような世界をつくり出しているわけである。

いろいろの社会は皆、人間からできている。いろいろちがった種類の人間は、違った種類の社会をつくって気持ちよく暮らしている。われわれの問題の根源は、満足というものを測る手段が欠けているということである。われわれは経済的に計算された生活水準が満足の物差となっていると仮定する傾向がある。現在、世界は手押車で地獄に向かおうとしているような印象を与えるが、実際、そうなるのかもしれない。

情緒が知識のように蓄積されると考えるのは無意味であるし、次世代に手渡すことのできる、受け売りできるような情緒の手段などというものはないからである。文化と人格との間の関係の理解が深まるにつれて、われわれは社会全体を、利己主義と他人に対する攻撃という方向から、協力と社会的良心という方向に転じていけると、信じてても良い様な理由が少なくとも少しはあるからである。根本的な解答は、賢い人々の仕事を読むことによって得られる。人間は万物の尺度である。博愛心によって誤りを正されないような知識は、毒液や悪の性質をもつに至る。われわれに欠けているのは、これらの原理を実行に移す実際のやり方である。

さらに、テイラー（1970）『続・人間に未来はあるか—最後の審判』も再読して、同じく気になる点を次に要約する。彼は、序のかわりに、ヨハネ黙示録 7・8・9 章を引用している。ヨハネはイエスの十二使徒の一人で、神の啓示を受けて黙示録を書いたとされている。また、テイラーは表紙にミケランジェロが描いた最後の審判の一部を用いている（図 2、図 3）。



図 2. ヨハネ Joannes、ハンガリー、ブダペストの聖イシュトバン大聖堂



図 3. ミケランジェロ 1535~41、最後の審判、原画は撮影禁止で、これは解説ポスター。イタリア、バチカンのシスティーナ礼拝堂。

飢餓と伝染病と戦争は、古くからの人口調節弁であった。もう一つの奥の手は、人が寄集って、ストレス病によって死に始めるとき、能力と生殖力を蝕むことで、すでにそれは起こり始めている。

時は敵なり。問題は「許された時間内で対処できるか」である。もう手遅れなのか？人間ほか生き物の人口 population 爆発 {注：人間は出版当時の倍、74 億人になっている}、大気・水質への農薬・重金属・放射性物質・食品添加物などの汚染、著しい気候変動、エネルギー問題、食料安全保障問題など、課題は増えるばかりで山積している。

これから人間が他の自然とどのように共生していくべきかという問題が生まれてくる。教育は今日、その真の機能—国民の一人一人が自分の望むような人生を送れるように手伝う—に関して、500 年前ほども関心を持たれていない。A. D. サハロフ（ソ連の水爆の父）は、文明が核戦争、飢餓、退廃した大衆文化、官僚的ドグマの脅威によって危機に瀕していると論じた。飢餓と人口課題の問題の重大さを指摘したが、世界中から寄せられたのは沈黙だけであった。A. モーロアは、人口の過大になった地球は、知的でない世代をつくりだす。文化は余暇と静寂を要求するが、それは失われているからだ、と警告している。

現存のあらゆる組織は一掃されるべきだという現代 {注：1970 年頃} の大学生たちの信念を裏づけているものは、実にこの可能性（たとえば、ロールスロイス社は良い車を少数生産することで満足を得る）に対する直観的な認識であると、私は信じている。工業社会は自己破壊的な過程に陥っている。満足を与えることができると信じ切って、不満を生み出すような手段をつかって、大量の品物をつくり出している。使うために生産するのではなくて、生産するために使う破目に陥っているのだ。政府が環境問題に有効な行動を起こすことのできない理由は、政府も、政府が代表する国民もこのような抜本的な再編成の必要性を認識していなかったり、受け入れていないからである。政府や国民のこのような怠慢こそ、まさに多くの学生が現在の社会を破壊しようとする理由となっているのだ。

広く言えば合理主義が、特に科学が宗教に代わった。宗教を人間の生活に目的を与える神話と定義したいというなら、科学は宗教であった。人間が環境をつくりかえる無限の能力を持っているという共産主義者の信念は、18 世紀に特筆された改良家の楽観論にすぎなかった。今日、宗教的な信念は、科学者の間ではもちろんのこと、さらに衰えているが、一面、人間の無力感、虚無感も一層強くなっている。だが、{注：汚染物質に抗議する人} その同じ人たちが、今後自分が訪れる当てもないような溪谷がダムにされるとか、ある種の動物や植物が絶滅に瀕しているとか、前技術時代の人間文化が破壊されつつあるのを聞いても、全く何の感動も起こさないであろう。

自然への愛が、それを体験する人々に特に重要な純粋な宗教的体験であるということが事実なら、われわれが合理主義者の見解をとって、宗教的な要素を拒否したとしても、価値と重要性についての体験は残っている。これこそ、人間がなぜ自然への愛を守ろうとする試みにそんなに深くかか合うようになるのかの理由であり、それを人間から奪うことは正しくもなければ賢明でもない。それは明らかに高尚な経験であって、われわれにはあまりないものだからであり、おそらく現代生活のストレスを耐えていくのを助けてくれるからである。人間の多数が都市に住むような世界では、自然はもっと必要とされるであろう。

原始時代の物活論 {注：アニミズム} は、植物や生命をもっていない物もある意味で自分と同じものと見なくてはならないという感情を表している。近代の合理主義は、この感情をむしばんでいる。このように技術社会はその道を逆行させることも、このような感情を認めようとしないうちに見える。将来のいつの日にか、自然との関係をもどそうという広範な要求が起こるだろう。それまでに自然を壊してしまっていたら、われわれは許すべからざる罪を犯したことになるであろう。

テイラーが結語で言いたかったのは、科学研究の成果を技術として用いる前に、その範囲を十分に論考する必要がある、技術的に実現された過剰な便利、個人的なニヒリズム、

拡大した自由への責任の取り方は、経験・思索が詰まった古典的な著作から、原理と実践の方法が示唆され得る、ということであろう。この著述がなされてから、50年を経たが、人間の欲望は果てしなく広がり、課題解決は五里霧中である。さらに、生命科学や情報工学は技術的に発達し、人工知能 AI から無人兵器・自動運転車など、人間の職業の多くが機械に代替されるようになるという。極地戦争では無人機によって無慈悲大量に兵士も市民も殺害され、日々の暮らしもカメラで監視され、AI の支配に服するのだろうか。オーウェルの描いた 1984 年以上の息苦しい未来が来るのなら、テイラーが言ったように、その来る未来を、人間に未来があるというのだろうか。これほどまでに踏み迷っているのなら、私たちは欲望を制御し、教養ある別の道を探る必要があるのではないか。

2. 失われる未来に残る希望

この課題を深めるために、次にイリイチの思索から、特に、自由、任意、無償性について学びたい。イリイチの発想の全体的理解は、私には難しいので、イリイチと最後のラジオ・インタビューを行った D. ケイリーの著書序論はそれをかみ砕いていて（カナダ放送協会 1988）、大いにその理解の助けになった。C. テイラーは序文で次のように記している。

「我々の現代の状況を、墮落したキリスト教から出た副産物とするイリイチの理解は、現代という時代をもたらした歴史的なベクトルの重要な一つを捉え、以下に善と悪がその中で緊密に織り交ぜられているかを見せてくれる。われわれの文明は、苦しみを和らげ、人間の福祉を増進することに深い関心を抱く文明であると同時に、われわれを異星人めいた非人間的な存在へと変化させる諸々の形式の牢獄に閉じ込めようと脅かす文明である。」

ケイリーは、まえがきでイリイチは冬の日本でインタビュー（1986～1987）で、あるべき未来について尋ねられて、次のように答えている。

「未来などクソ喰らえだ。それは人間を喰い荒す邪神だよ。制度には未来がある。しかし人々には未来なんかない。人にあるのは希望だけだ、と答えたそうだ。われわれが生きている無限の経済成長のユートピアの未来を、早晚やってくるカタストロフィー以外の何かとして思い描く人は、正気の人間の間には一人もいない。未来は邪神として、天がわれわれの上に開くかもしれない唯一の瞬間、すなわち現在を喰い荒している。期待は明日を無理強いする。希望は現在を押し広げて、未来を作る。未来の北方に。」

ケイリーは序論でイリイチの思想を要約して、少し長いが次のように解説している。

「学校化のための制度のもつ、驚くほど教会に似た性格と、学校化の主張とその実際の結果との間の奇妙な不一致、学校化は社会的平等を生み出すためだというのが、正反対の結果を生む（『脱学校の社会』1971）。また、開発はサブシステム（地域が有する環境に適合した自存自立の生活）に対する戦争であり、決して終わることのない消費の行われる地上の楽園への展望を切り開くものだ。しかし、開発は決して埋めることのできないニーズを生み出し、決して提供されることのないサービスの要求を生み出すことで終わる。同時に、開発に付属する魔力は、サブシステムの尊厳を奪い、自ら足るを知る生活の追及を不可能にする。

学校は落伍者の生産システムであり、単に大多数が成功できないということだけでなく、達成できない人々が自らを恥じるようにさせられる。学校が立身出世の登竜門とされるや、単に貧しいだけであった人々が中途落伍者という不利益をこうむり、劣等感を抱く。学習に値することは教育に抛らねばならないという幻想を助長する。学校化は世界的な広がりを持つに至った宗教であり、そのサービス業務と行政機関が、救済のための唯一の通路であると主張した最初の制度、すなわちロ

一マ・カトリック教会の末路であることが証明される宗教そのものである。職を得、社会的地位を獲得するための唯一の方法としての学校化に反対したのであって、学校が学習を組織する上で、合理的で実践的であることは認識していた。

自動車の量は移動性を窒息させ、読書の困難は教育経費に沿って増大し、医療は、それは治癒するのと同じ位多くの病気をつくり出す。制度的技術的成長が度を過ぎれば、自分の言葉で話し、驚き、自己の死を死ぬという、人間のもっとも基本的な能力を植民地化し、影で覆ってしまうことである。サービスの成長よりは自由の拡大を社会進歩の判断基準にしたいと願ったのである。健康の収奪である医原病は、医学的ヘゲモニーがいかにか患者の、自ら治り、苦しみに耐え、死ぬ勇気と能力を破壊することで、畸形化する。野放しの医学的治療は、苦しみと死からその意味を奪い去り、かつ人々が尊厳をもってそれらと直面した文化的伝統の土台を掘り崩す。

破壊の道具は不可避免的に、統制や依存や収奪や不能を増大させ、富者だけではなく貧者からも自立共生を奪わずにおかない。この自立共生こそ、多くのいわゆる低開発地域の基本的な財宝なのである。ヴァナキュラーとは、なんであれ、家で育てられたり、家で織られたり、家で成長したもの、家で作ったものに関係していた。人々の日常の必要を満足させられるような自立的で、市場に関係のない行為である。

善とは、ある与えられた環境の中で他に比較しえないユニークな形で場に適合するものことである。それは一定の規模を守り、ある均衡を表す。また、フィットし、感覚はこのフィット感を認識し、また調子が狂っているものを認識する。他方、価値とはそれに適正にフィットする場もなければ、もって生まれた固有の制限のない世界通貨である。価値はすべてのものを、その有用性と相対的稀少性で、ランク分けする。価値は、あるべき均衡の感覚を掘り崩し、経済的算術で置換するのだ。善いものは常に善い。価値は、それが競争相手の価値を凌ぐ時にのみ意味をなす。

書物はこの時代（1980年代）の根本メタファーであることをやめた。スクリーンが取って代わったのだ。人々はますますヴァーチャルな、あるいは非・場所的空間で時間を過ごすようになっていく。倫理とは、エートス、つまりある場所におけるある民族の精神、を表現する行動原理であった。

現代西欧社会は、いかなる意味においてもポスト・キリスト教とはいえず、むしろキリスト教の倒錯した形態を構成している。現代的観念の全体的布置は大部分、その双肩に国家がかかっている「市民」から始まって、国家の存在理由であるサービスに至るまで、まともな人々が守りたいと願っているこの宇宙惑星的「生命」から、それを脅かすテクノロジーに至るまですべて、キリスト教というオリジナルの歪曲である。＜聖ヒエロニムスからの引用＞裸のキリストに裸で従う。

西欧社会の道具化の増大する鞏固化と手に手を取り合って、人が伝統的に無償 *gratuity* と呼んでいたものに対する心遣いの欠落が進行した。現代の一つの相は無償性の喪失である。啓蒙主義と共に、哲学者は概して善の追求としての倫理やモラルについて語ることを止め、その代わりに徐々に価値評価できるものについて語るようになっていく。近代の終わりにあって、どこか目的追及的なところがなくても、善であり、美であるような行為を想像することはとても難しくなった。わたしはこの世界で、自分が愛する人々と共に生きること以上に素晴らしい状況があるとは思えない。

現代をポスト・キリスト教の時代と呼ぶのを拒み、それを黙示録的なのだと主張したのは、アクイナス〔注5〕の弟子志願の人間としてであり、信をもって知を求め、知をもって信を求め。ベツレヘム〔注6〕以後の全時代は定義からして黙示録的であるが、現代の語法ではアポカリプス（*apocalypse* 黙示）という言葉は何か大惨事のようなものを意味するが、私にとってそれは覆いを取り去ることであり、ヴェールを剥ぐことだ。最善の墮落は最悪であるという仮説を扱っている、ということだ。

注5；トマス・アクイナスは13世紀の教会博士、『神学大全』等の著者。

注6；イエス・キリストの生誕の地。

さて、私はイリイチの仮説に賛意をもった。期せずしてイリイチと同じ思考のもとに、私はこの時代に絶望し、言葉を失ったので、『生き物の文明への黙示録 implication』を書くことにしたのだが、私はキリスト教徒ではないので、新約聖書のアポカリプスの意（啓示 revelation）の用語を用いないことにした。私の意図がイリイチの思索で、改めて明確にされ、共感を得たように思う。

カラヴァッジョ（1606-07）が描いたロザリオの聖母をよく見ると、聖母子に敬愛の視線を注ぐ人はおらず、彼女が与えたロザリオをもつ修道士に慈悲を乞う視線が注がれており、信仰のあり様が問われているとマスター・ガイド（日本人）は彼女なりの鑑賞解釈で説明していた（図4）。先学からの教えはありがたいが、それを参照しつつも、やはり自らが直接、本質、原点・原典にあたり、学ぶべきだと考える。イリイチが、現代的観念の全体的布置は大部分がキリスト教というオリジナルの歪曲であるので、裸のキリストに裸で従う、と言っている意味は修道士にではなく、聖母子に従いたいという態度と受け取れる。これを信仰の個人主義と理解したい。



図4. カラヴァッジョ、ロザリオの聖母、オーストリア、ウィーン、美術史博物館。

3. 商業主義の蔓延

イリイチが言うように、何もかもが商品として金銭的評価で価値づけされる。真なる行動規範原理、善なる社会的無償行為、美を探究する芸術作品なども、すべてが商品化されてしまい、価格が付けられる。金もうけにならない行為は意味をもたず、何もかもが、人の心情までもが欲得の売り物で、大衆社会一般がそう信じるように、学校は教育しているようだ。個人や家族が自ら野良で食べ物を作る、生活用品や趣味の作品を創る、生業 subsistence、売らない仕事、そうした自由な楽しみ、望みを、金銭価格が奪い、阻害する。素のままの美しい暮らし Sobibo は自然（じねん）で、真（ありのまま）の善き生活である（木俣 2015）。人間にとって、最も大切なのは身も心も自由であることだ。他の生き物の暮らしにとっても、きっと自由がいちばん大切なものだ。商業主義の対極にある農業から、現代文明を見直してみよう。内田ら（2018）は、農業（正確には農耕か）について次のように論じている。

（内田）農業の存在理由は人間を飢えから守ることです。供給量があるレベルを割った瞬間に農作物は商品ではなくなります。それがないと死ぬというものになる。農業を営利事業にした場合には、確実に商品作物のモノカルチャーになります。費用対効果が一番高いからです。食料安全保障の面から言うと、そういう仕組みが最も飢餓に対する耐性が弱い。いつの時代でも、シンプルでわかりやすいストーリーを好む人たちが主流派を形成します。（しかし、）多様なものが混在している社会しか危機的状況を生き延びられないからです。東京は危機体制のきわめて脆弱な首都なのです。あらゆる資源の東京一極集中を進めている。東京五輪なんか、全く必要のないイベントですけれども、そういうお祭り騒ぎに桁外れの国費を投じている。福島原発事故では、首都機能が喪失する寸前までいったのです。日本だけが何も考えていない。国が人口減についても、シンギュラリティ〔注：技術的特異点〕がもたらす大量失業についても、何も考えていない。政官財メディア、誰も先の事は何も考えていないことが次第にわかってきたので、若い人は自力で生き延びるために地方移住を始めたわけです。農業というのは相対的にはかなり安定した仕事だということがわかります。収益はあまり期待できないけれど、食べることはできる。自分自身の技術は蓄積して年々高まり、農業労働者として熟練熟達することは実感できる。そういう手応えがあって、しかも周りに感謝されるという仕事って、なかなかありません。

（藤山）自分たちがいかに手間暇かけて自然からものを取り出して、日々の美しい暮らしを作っているのか、そういった営み、頑張りというものをどれだけ記憶として受け継いでいるか。住んでいる人たちがその価値を再認識して、それを子供に教育としてちゃんと伝えていくことが大切です。

（宇根）天地有情の中での仕事の心地よさというか、嬉しさというものが、知らないうちに自分を支えてくれているわけです。百姓という呼び名は、かなり誇り高い言葉だったのです。百姓仕事の場合は、仕事への没頭から醒めて見渡す世界は、天地自然の中です。百姓仕事を天地自然との協働だととらえるのが農本主義者の特徴です。百姓自身が、資本主義としっかり対峙してこなかったのだと、私は思います。社会の進歩、効率化、所得が増えること、便利になることがいいことなんだ、ということは、農の本質と矛盾するのではないかと考える思想が決定的に不足していたと思います。食べ物は天地の恵みだという感覚を取り戻す思想を百姓が語らないなら、誰が語るのでしょうか。人間は資本主義の価値観だけで生きているのではないことを、百姓は天地有情の世界で示していく、そういう時代がそこまで来ています。

これまでに数多くの心ある百姓や学者たちが多くのことを語り、良い未来について提案してきたが、大多数の人々はそれを聞こうとしなかった。三猿を決め込んで、欲望に踊り

続けており、多くの人間は自ら救われようがない。しかし、ムラ社会に深くかかわろうとしない評論家的研究者は、田園回帰・自然志向を賛美するが、現実の厳しさ・醜悪さについては知らないふりをして、あるいは、現場を知らないので、事実についての発言が少ない。

私が受験生の頃、岐阜羽島にある祖父の田舎で、例年通り夏の一週間を過ごした。ここは木曾三川の流れる濃尾平野の水田地帯だ。朝早く散歩に出て田圃を歩いていると、昼には、あの若い男は誰かとうわさが飛んだ。こうした村の監視されているような狭さが嫌だった。その後6年ほどして、私は東京で職を得て、関東山地を中心に山村調査を始めた。40余年、山村に通い続けて、何百人もの村人と田畑や茶の間で語り合ってきた。それでも、大方の村人は、私を旅の人としか見ていなかった。とりわけ村役場や有力者はあえて無視、黙殺してきた。このような対応に関しては、同様の地道な自然学校をしている団体からも何例か聞いたことがある。私たちが村で孤立していたのではなく、村人こそが深く孤立していたのだろう。

雑穀栽培を保存するために、雑穀街道をFAO世界農業遺産に申請しようと普及啓発活動を5年間ほど続けてきた。最近、山梨県上野原市農業委員会の方々から次の事を聞いた。ムラ社会では村人が話し合うことも少なく、それぞれに孤立的存在である。農耕技術の改善協力、作物作付の状況共有などがなく、技術・技能の継承ができず、作物の生産過剰と不足が浮動する。残念なことに、私の直観はおおよそ合っていて、ムラ社会という地域共同体は助け合いを大事にしているということは誤解であったようだ。羽島での経験とは異なって、関東山地の山村では村人個人から旅の人のことはほとんど広がることがなかった。つまり、山村では地域共同体が著しく傷つき、崩壊に向かっているということだ。

都会の人々は学者であっても、ムラの人々の深い心の中の傷害、卑屈さ、自閉性を同情や共感をもって知ることもなく、少しも覗き見ることもない。また、著しく変動する多様な自然環境のもとでの、農耕技術・技能の習得は実際には容易ではないのだが、都市民は無知ゆえに、農耕はあたかも簡単な技能と誤解した先入観を持っている。農耕技術・技能の習得にはそれなりの年月が必要であるという事実も正直に述べない。

4. 旅の人と呼ばれて

このところ、The Last Samurai ならぬ The Last Millet の気分である。このくにの人々を支えてきた雑穀を lost crops にしてはならないと40年以上働いてきたが、目先の私欲の果て、いつか見た道への終末時計23時58分に義憤のやり場がない。混迷を深める時代には一層深く学び、地道に考えることが大事と思う。地方創生と大騒ぎしていても、辺境の地道な市民活動にはほとんど関心がもたれず、日本の行政府は何時まで経っても箱モノづくりばかりで、家族農業で必要な、大事な歴史的民具なども捨て去り、いよいよ入るのが解けて無くなって、ものまね空っぽの田舎になってしまいそうだ。

私は、上述したように、45年ほど国内外の村々を経めぐって、雑穀の栽培と調理の調査をしてきた。山村に住んではいけないので、村人ではないから旅の人と呼ばれる。しかし、調査日数からして実滞在年数は7~8年にはなるだろう。人は旅をして、思いやり深い成人になるのだと思う。しかし、旅をしても何も見ない人もおり、旅をしなくても多くを学ぶ人はいる。また、村に住んでいても多くを見ない人も多いから、何ごとも人の意思によるのだろう。私も村人になったら、ムラ社会の中で生きるようになったら、都市的自由を失ったに違いないので、村に頻繁に通うという在り方で良かったと思う。旅人だか

らよそ者で一概に悪い人と言われているようではどうもなさそうだ。いく人かの古老たちからは、村人でもないのに、村のことを思い、いろいろやってくれてありがとうと言われているのだ。それにもかかわらず、村の為政者たちからは、恐らく煙たがられているのではないかと感じる。私は特定の村の為に、農山村の誇りを主張しているのではなく、自然に寄り添う暮らしこそが誇り高く、人間の生活の基層原理だと考えているのだ。古老を敬愛しているのは、彼らが伝統的知識体系や技術・技能を保持しているからだ。ところが、今や村の為政者は古老に敬意をもっていないようだ。

都市はもちろんのこと、山村でも地域でのコミュニケーション {注7} が機能せず、コミュニティ {注8} が崩壊してきた、この日本の悲しみを強く意識する。意思や意味を持った言葉が重要だが、すでに言霊が重みを失って久しく、言葉の断片やその羅列としての情報データが、個人情報保護から外れて、ビッグ・データなどとして勝手に売買され、知らない会社の金儲けのために利用されている。いつのまにか平安に暮らす自由が著しく侵害されている。

注7: コミュニケーション communication とは社会生活を営む人間の間で行われる知覚・感情・思考の伝達。生物学では、動物個体間での、身振りや音声・匂い等による情報の伝達のこと (広辞苑)。

注8: コミュニティ community とは、同じ地域に居住して利害を共にし、政治・経済・風俗などにおいて深く結びついている人々の集まり、地域共同体 (広辞苑)。

これまでは公務と並行して、かなりの自費を用いて社会的共通資本を保全し継承する任意公共活動を行ってきた。社会的共通資本には多くの事象が含まれるが、特に私は、自然と農山村の保全、生物文化多様性の継承、環境学習の素材である伝統的知識体系の技能実践、研究普及に大きく関わってきた。市民が、自ら支払った税金からの公金助成に抛らず、任意の私費や寄付により、非営利活動をすることはとても大事で、必要なことだ。行政府に丸投げの地域保全ではいけない。しかし、私はもう高齢になったので、職業を持たなくなり、これで社会的義務と責任から大方外れて良いと考えている。もう舞台から降りても良い、否、むしろ引きずり降ろされる前に、降りるべきだろう。余計なお世話の老害やできもしない過信による年寄りの冷や水はなすまい。将来は若者たちの手や頭で持続したらよい。

5. この醜くい国—親切の対義語とは何か

日本列島の自然や農山村の景観はいまでも美しい。素のままに暮らす山民の心情も美しい。5,000年前の縄文人が使っていた山畑での野良仕事は、冬でも暖かい日差しに、谷から吹き上げる風が快い。鍬一つで耕し、育て、収穫した有機無農薬の穀物、イモ、マメ、野菜を家族・友人に分ち、料理してともに美味しく食べる。これだけでも私には生きる喜びがある。

都会に出ると、電車中や街路上でも、あまりの不親切に出会って、不愉快になって帰ってくることが多い。小路では道を譲りあわない。大道の雑踏の中でも風を切って歩き、直進してくる。自転車は逆走してはばかりず、赤信号で止まることもない。電車の中では誰もが無言で、席を奪い、ドア付近に大荷物を置き、乗降の動線を妨げている。車内の移動や乗り降りの際に、無言で体当たりしておきながら、謝りもしない。不快な金属音を漏らしながら、音楽を聴く。ほとんどの人々が、ラインやゲームをしているのか、携帯電話(スマートフォン)の画面にくぎ付けである。このような異様な行為と景色に、良い年齢にな

っても、躰のない、無関心の人々が多くいるのかと残念に思う。不躰は若者の専売特許ではなく、人生経験を経たであろう老人にも無教養の人々があまりにも多い。これらは環境も心身も砂漠化した都会の悪い一面だ。都市には面白いこともたくさんあり、都市が創造した表層文化も数多くあり、もちろん全否定しているのではない。しかし、都会において市民の知性と品性が劣悪化し、ストレスが強まるのは悲しいことである。柳田邦男(2005)は、日本人が壊れていく原因の一つを情報環境の変化に探っている。気になる指摘を次に抜き出して置く。

テレビやテレビゲームはバーチャルリアリティ(仮想現実)の世界だ。社会生活の経験が少なく、情報への批判力もない子供が、毎日長時間テレビを見たりゲームにふけったりしていると、その子にとっては、仮想現実の世界と現実の世界の区別がつかなくなるばかりか、やがて仮想現実の世界のほうに現実味を感じるという逆転現象が起きてくる。そういう点で先駆的といえる世代が、すでに二十歳代{注:現在では三十歳代}になっている。1960年代から70年代にかけての高度経済成長期には、日本列島の開発と都市化の波の中で、田舎は遅れたところという価値観が一段と支配的になり、それぞれの地域ならではの暮らしや風土の豊かさやそれらを映す方言といったものは、ブルドーザーに押し潰されるような形で否定的にとらえられるようになったのだ。

私は祖母に地道に生きるための躰として厳しく言われた事どもがたくさんあり、それが私の内気を増長させたのかもしれない。他者の物を取るな。嘘をつくな。食べ物は大事にしろ。物を粗末にするな。他者に迷惑をかけるな。新聞に載るようなことをするな。上を見ても、下を見ても限がない、人を羨むな。・・・ 実母を2歳で喪って、そのことを20歳まで知らなかった。祖母が私を厳しく育てたのは、実母に成り代わっての責任と温情だったのだろうか。

親切の語義は、人情の篤いこと、親しく懇ろなこと、思いやりがあり配慮が行き届いていること、である。それでは、単なる不親切ではない対義語とは何だろうか。さらに、広辞苑で探ってみた。冷淡は、物事に熱心でないこと、同情心のないこと、不親切、とあるので、対義語の一つと言えよう。非情は、喜怒哀楽の情がないこと、また人間味や思いやりのないこと。無情は、情け心のないこと、情愛のないこと。無視は、存在や価値を認めないこと、ないがしろにすること。卑下は、卑しめ見下すこと。平等は、偏りや差別がなく、すべてのものが一様で等しいこと。公平は、偏らず、依怙臆の無いこと。

昨今、この国の偉い方々の振る舞いを見ていると、あまりに醜い。いかにも、「美しい国」は日本会議の作る虚偽の都市伝説である。大元は山縣有朋ら長州軍閥が作った、明治維新という神話、靖国神社の系譜にある。この件については書くこともいやだが、それを利用しあったのが森友学園の瑞穂の国小学院だ。教育勅語を子供に暗誦させることに共感した総理大臣夫人が援助をしたくなるところに付け込み、悪乗りして彼女を利用した理事長夫妻、不公正な便宜を図り、公文書まで書き換えた高級官僚の所業は、青少年の人生観に対して大悪をなし、とても罪が重い。明治維新の醜い権力争いの内情と同じで、嘘をつき通せば、歴史的真相にすらなるようだ。友人に便宜を図るために、公正さをないがしろにした加計学園の問題も同断だ。靖国神社や日本会議を私利私欲に利用すべくまつわる人々が右翼・愛国主義と自称するのはそれも表現の自由だろうが、彼らは民族主義者ではなく、ましてや愛国者ではない。明治維新前後から、第二次世界大戦、そして今でも、明治維新の暗黒を生き抜いてきた山縣軍閥の系譜が蠢いているようだ。

いくら臆目に見ても、せいぜい官僚が「以心伝心、忖度？」により立身出世を図ろう

としたことが、明確な動機だ。文書記録が証拠として出されても、分かっているのに白を切るなど、官僚も政治家も極悪人だ。この事が、どれほどこの国を醜くしているのか、最も地位の高い者たちのなせる悪行、虚偽と隠蔽は青少年たちに大きな影響を及ぼしたに違いない。公正、正義、道義もない。そんなにまでして、出世したいのか、金権が欲しいのか。政権の私物化、選挙で選ばれていない家族を重要な地位につけて良いのか。公務員は公私の行為を明確にせねばならない。職務上、公的なものを自分に都合の良いように、私してはいけない。ごく当然の倫理ではないか。私は文部大臣から任命された元国家公務員文部教官教授として厳に慎み、任意の公共活動のために私財を公に用いることはしたが、公を私しないように気を付けた。個人、私人、社会人、法人、公人、それぞれのレベルで、大きな責任がある。地位の高い人が責任を取るべきであるのに、直接の作業員／個人の責任に還元するのは間違っている。最終責任者および社会組織／法人の責任、とりわけ、公的機関・組織としての公務員、公務員特別職の責任を明確にすべきである。

日本国民は多様な民族の集合体だ。日本国籍をもてば、日本人だ。しかし、国籍だけでは日本民族にはならない。当人の自由意思で日本列島に居住し、日本の文化に敬意をもち、学び続けて日本民族の一員に育つことになる。偏狭な自民族中心主義で言っているのではない。自民族に誇りを持たなければ、多様な民族にも敬意をもつことはできないということをお願いしたいのだ。この美しくくにを支えているのは、自然に寄り添って自立して暮らす、誇り高い農山漁村民だ。これらの人々の故に、日本の自然と文化に憧憬を持ってくれた欧米やアジア・アフリカの優れた人々も少なからずいたのだ。

人間の集団には多くの類型がある。たとえば、現代日本という国民国家には国籍日本人が存在している。国籍日本人は、歴史的に多民族を融合した今日の日本民族が圧倒的多数になっているが、先住縄文人の系譜を継ぐアイヌ民族（約 23,000 人、東京に約 5,000 人）、ウィルタ民族（約 300 人）、ニヴフ民族（約 5,000 人）、琉球民族、小笠原諸島欧米系島民、近現代に移住した朝鮮族、漢族の他にアジア、ヨーロッパ、ラテン・アメリカなどの多くの民族の人々（約 225 万人、2012）も日本に居住している。人々の集団の定義を整理してみた。

民族とは文化の伝統を共有することによって歴史的に形成され、同属意識をもつ人々の集団。文化の中でも特に言語を共有することが重要視され、また宗教や生業形態が民族的な伝統となることも多い。少数民族は、社会を構成する民族集団のうちで、支配的な民族集団とは異なる言語・宗教・慣習をもち、社会の周縁部や被支配的な地位にある、一般に人口の上でも少数の民族。先住民は、現在住んでいる人々に先だって住んでいる人々。部族は、人種・言語・文化などの特徴を共有し、一定の地域内に住んで同族意識をもつ集団。また、国民は、国家の統治権の下にある人民、国家を構成する人間、国籍を保有する者、国権に服する地位では国民、国政にあずかる地位では公民または市民と呼ばれる。常民は、普通の人びと、エリートでない人々、平民、庶民とほぼ同義である。個人は、国家または社会集団に対して、それを構成する個々別々の人（広辞苑）。

民族集団 ethnic group とは、同一の文化体系ないしは国民国家のなかで、他の同種の集団との相互行為的状況下であり、接触、反発、同化、融合を繰り返すなかで、相互間の境界はあいまいでありながら、なお自らの伝統的文化を維持し、われわれ意識によって結ばれている人々による集団のことである（世界民族事典 2000）。

ここでは論考に混乱が生じないように、基本的には広辞苑の定義に従うことにする。私は雑穀の調査研究のために、国内外の農山村に何百戸もの農家を訪問し、聞き取りをした。

雑穀は、minor crop、coarse crop あるいは lost crop と呼びたい人もいるが、決してマイナーな穀物ではなく、今日でもアフロ・ユーラシアの多くの国・地域で主要な食料として、多種の多様な品種が沢山栽培されている。稲・麦を主穀とする人々が差別的にその他の穀物を雑穀と総称しているにすぎない。雑穀を歴史的に公正に見ると、稲・麦と変わらず、重要な役割を果たしてきた。しかし、偏見によってマイノリティの地位に意図しておかれている。少数民族や先住民族という民族集団も同じようにマイノリティの位置にあるので、両者に感情移入して、共感することが多い。決して失われた栽培植物ではない。民族、植物、言語、少数者は自ら消滅を宣告せず、暮らしのために、抗い続けてほしい。憐れみを受ける必要はなく、自律して歴史を蓄積した誇りを高くもちたい。民族をつなぐもの、分かちもの、越えるもの、みな心をつなぐものとして大切だ。多様性を失うことのない歴史事実の尊重を求めたい。

6. 個人主義 — 自由と幸福を求めて

このくにの教育の目的、目標を厳しく問いただして、改善すべきだ。学校へ行きたくない児童生徒数、いじめ件数、青少年の自殺件数、突発的な傷害事件、万引きの常態化、教員・教育委員会の隠蔽保身、こうしたことが何十年も続いているのは、学校教育制度と教育の手法や内容に深い問題があるからだ。そこを見つめ直して、改善しなければ、不幸は続く。学びは楽しいし、大切なことだから、学びから逃げだし、考えることを停止するような文明は漸次崩壊に至る。

日本軍の実態を知るにつけても（吉田 2017）、日本の教育の旧弊は日本軍隊のいじめの構造と同じで、敗戦後 70 年を経ても良い方向には未だに変わらない。受験教育で学ぶ楽しみを奪い、人の格付けをする。イリイチが言ったように、学校が選別して落伍者意識を刻印する。たかが有名大学に受験合格しても、それはごく少数の人の人生の始まりに過ぎない。それなりに長く、広い人生には、大勢の人々にもたくさんの可能性がある。学びの機会とその成果は、楽しい人生を過ごすことに向かうべきだ。いわゆる一般人が誠実に地味に働いても、社会的評価は低い。金銭評価が大方なので、これがすべてだと思ってしまう。無償の行為は金銭的価値がないから、そんな無償の行為は存在しないと思ってしまう。人間として社会的に生きる楽しみ、歓びが金銭にならないとして、否定されてしまう。虚無に陥るしかない。ごく一部のスポーツ選手や芸能人などという人が特別扱いされるいわれはなく、彼ら以外の市民を一般人と呼称する尊大さはあまりにも醜い。才能ある人がその才能を大切に花開かせるのは賞賛できるが、才能がなくても努力する人も立派だし、大方、楽しみで芸能やスポーツをする人も、それだけでとても良いのではないのか。見ることも楽しいが、自分でやる方がもっと楽しいものだ。

重ねて問うが、日本の教育は基層のところで真摯に見直すべきではないのか。不登校、いじめ、自殺があまりにも多く、長年解決に向かっていない。学校教育制度がすべてではない。家庭や地域社会の学びの場こそが重要だが、今日のこの国と人々は、学校以外の学びの場をほとんど認めないほどに、学校制度に固着依存している。卒業証書、ライセンスが欲しいだけで、多くを学ばずに、熟練した職人のように技能的な内実をとまなうこともない。いわば金銭で買ったような証書が尊重されるようでは、中身の実力がどれほどに担保・保証されているのか疑わしく、現場で実際に実力を見てみないとわからない。受験教育の成果・資格証書よりも、学習成果の自律した中身を問いたいのだ。

私は東京学芸大学連合大学院博士課程の教育構造論講座（環境教育学研究）担当教授と

して、環境教育学研究に関して、世俗的には日本の最高権威者〔注9〕であった。大学院設置審議会には農学（京都大学農学博士）と教育学で審査を受けて合教授に認定され、環境教育学を講じ、博士論文の審査をする資格を得ていた。私は退職に際して、その責任および日本環境教育学会創業者の責任を果たすために研究のまとめとして同学会誌に「環境学習原論」を提案した。私は植物遺伝学から出発したが、職業的義務から沢山の教育学古典書を読んで、なかでもイリイチの論に共感し、環境学習専攻として環境学習構造論を提案したのだ。しかし、日本の教育学者は教育の構造を根底から考え直した「環境学習原論」には何の関心も持ってくれなかった。他方、日本環境教育学会も、持続的開発論に流され、本質的な環境論も教育論もほとんど論議せずに、また、現場での実践も疎かにし、環境学習理論を正当に扱わず、その結果、環境教育は深い理解の下に日本の教育の在り方を良い方向に変える知的な力をもたなかった。

日本の学校制度が、人生を幸せに過ごすための学問を求めているのなら、私たちは制度にのみ依存しないで、自ら師を求めるべきである。人は学校の卒業証書によって何を学んだのかを評価するのではなく、誰の弟子として何を学び、現場で何を実践しているのかを問うべきであろう。私は自ら求めた師たちに学べたことに、個人として高い誇りを持っている。私たちは生長し、幸せな人生を過ごす中で、数多くの先達・家族・友人に支えられている。それを自覚して、彼らに心より感謝したい。

〔注9：実は誰もそう思わないほどに残念なことに日本の大学教授には権威はないので、偉ぶって言っているのではない。単に制度上の事実を述べているのだ。〕

知的価値が金銭経済的価値に従属していることに、知を求めることに誇りを失った大学人は羞恥を感じないようだ。大学も証書ビジネスで、結果的には斜陽産業にすぎない。この国では、社会的事業は国庫交付金（税金）に依存し、税金とは別に市民は任意な寄付を、即時的・即自的な見返りのない無償性の社会活動、社会的共通資本に、ましてや大学にはしない。非営利の市民活動は社会・公的な活動であり、原則として自費と任意の会費や寄付で支えるものだが、この国では残念ながら資金難で継続性が低い。一般のNPO法人に寄付しても税金は控除されないし、認定NPO法人になると行政に提出する書類づくりで多くの時間が奪われる。女性方の誤解を恐れず、真意を率直に言うならば、実に怖ろしきは男（権力者）の嫉妬で、無償の活動は阻害されるか、黙殺されてしまう。この嫉妬は男たちが言うように、女（弱者）の専売ではない。行政も大衆社会も恩（無償性）を仇（無視）で返すのだ。

学問は既成制度としての学校・大学だけではない。本来、学問は自ら今を生きる師を選んで直接教えを受け、学ぶか、歴史上の師に私淑して書物から学ぶか、である。さらに、学びの仲間を求めることで大学という学びの場が生まれる。宇井純（1971）が東京大学で意を決して自主講座「公害原論」を始める時に、開講の言葉の中で要約すると次のように述べていた。また、本文の中で特に気になったことを、引用しておく。私はこの当時、東京教育大学院生で東京大学正門近くの本郷館に住んでいた。この講座を聴講し、水俣病患者らの支援のための学生行動委員会に参加しながら、一方で植物実験に日々を送っていた。

公害の被害者と語るときしばしば問われるものは、現在の科学技術に対する不信であり、憎悪である。個々の公害において、大学および大学卒業生はほとんど常に公害の激化を助ける側にまわった。・・・その対極には、抵抗の拠点としてひそかにたえず建設されたワルシャワ大学がある。そこでは学ぶことは命がけの行為であり、何等特権をもたらずものではなかった。立身出世のためには

役立つ学問、そして生きるために必要な学問の一つとして、公害原論が存在する。この講座は、教師と学生の間には本質的な区別はない。修了による特権もない。あるものは、自由な相互批判と、学問の原型への模索のみである。この目標のもとに、多数の参加をよびかける。

ポーランドにおいて大学は占領をうけるたびに常に抵抗の砦であり、占領軍によって大学は取り潰され、教授は銃殺か国外追放になるのは当たり前であった。それでも何年か経つうちには、必ず勉強を目指す学生が夜ひそかに教授の私宅を訪ねて、大学の講義を受け、それがだんだん教室の形をとっていった。いちばん根本にある事象は何かを、われわれが生き残るために必要な学問として、ここで皆さんと一緒に考えていきたい。

いつものことながら、公害においても外国に追随することしかできない日本の知識人のみじめさをつぶさにこの一年見せつけられたことである。環境問題は国際的なトピックスになり、われもわれもと公害について論ずることが一つの流行になったかのような観もある。あたかも自分だけが、対策の総代理店でもあるかのような、これまでの知識人の型と全く変わらぬやり方ではない。残念ながら、大学アカデミズムの中で、システム化された専門分野に没頭している学者たちは決して公害の現場へ行くこともない。そして、他の専門分野の進歩に期待し、自分の仕事の枠の中だけで公害を論じて、それが生活の資ともなる幸福な状態が今後も続くのであろう。日本でちゃんとした研究ができないというのも、あるいは大学で教えている学問がいつでも目先の展望を追い、目先の理論を次々輸入するからではなからうかという気がします。専門バカになったとたんに自分の狭い専門が、他人によって奪われ、あるいは壊されて行くのには耐えられませんから、まず、最初に専門家になった時に約束されることは、お互いに批判をしないということです。専門化された学問は、自分の生活から出たものではありませんから、外国の動きに対していかに遅れずに追いつくか、なんでそういうふうな学問が生まれたかということに全然考えずに、必死になって追及する、・・。外国語ができなければ、学者になれないのです。これは自分の論文を外国語で書くためではなくて、外国語で書かれた論文を読むために、どうしても読めなければ学者になれない。

羽仁五郎も、『都市の論理』の中で、大学の本質について次の要約のように述べている。すでに50年も、私は大学に身を置いてきた者として、いずれ大学とは何かについて、別稿で経験的に考察することにしたい。

近代の大学は、自立の都市においてはじめてあらわれたのである。“それは元来、市民の組合の一つであり、現に世界の最初の大学ボロニアの大学は学生の組合が主体であった。パリの大学も教師が市民的組合を形成したものがその母体であった。大学はその成立において学校が大学と呼ばれたのではなく、その学校に結ばれた学生組合がユニヴェルシタスと呼ばれたのであったことに注目せねばならぬ。ユニヴェルシタスは組合という意味で、学問という意味は全然ない。大学は封建的教会に対して学問の自立を主張した。大学は本来治外法権をもっていたのです。それは都市が封建的な公的権力に対してこれと戦って都市の自治権、都市の司法権を独立させていたように、ボロニア大学などは、封建的司法権力と戦って、大学の司法権を成立させていたのである。この大学の自治権というのは治外法権のことなのです。

これらの大学の学生はその他の市民の組合と同じく組合結社の自由を有し、武装の自由をもっていた。ヨーロッパの大学の学生は武装権の伝統をもっている。最近の戦争の場合にも、大学の学生が武装している。イタリアのレジスタンスなども、そうである。大学は学問するところであるなどというようなオブスキュランティズム〔注：反啓蒙主義〕では、大学の武装権の意義を理解することはできない。大学は学問の自由を守るために学者および学生が団結する組織である。学問の自由が守られているならば、大学は武装する必要がない。ソルボンヌの大学その他の多くの大学は元来貧

しい学生を主体としていた。裕福な学生は何も組合を作る必要はなく、個人教授を受ければよい。大学は学問の自由に関連して学生の経済的条件のための組織でもあった。高い授業料を取ることは大学の本質に反する。大学は元来一つの内的欲求から生まれたもので、上からの手によって創られたものではなかった。自立の都市こそが国民の学問および芸術を創り出したのだ。公共のための図書館にしてもそうである。

日本の国立大学は国家のために働く若者を養成するために、国家が創ったもので、ヨーロッパの原初的な大学の出自とは大きく違っている。理屈上の大学の自治ではなく、憲法で保証されている学問の自由は自ら心して守る活動の蓄積を求めたい。原初的な大学を体験したいと考えて、ささやかに日本村塾 Nihonmura College for Environment Studies を始めた。宇井純の自主講座「公害原論」の開講の趣旨と同じではあるが、1970年頃とは異なり、制度としての大学に依拠しないと、共に学ぼうと集まる人々は少ない。当時の学生・市民の熱気と較べて、制度化された大学や受験教育の全面否定をしているのではないが、いよいよ今どきは自由な学びの場は学校制度の枠外にもあってよいと、さらに強く思うのである。

宇沢（2008）は宇井を追悼して次のように述べている。私も若い人々に信頼を託したい。「宇井が、その生涯を通じて最も嫌悪し、闘ってきた、人間としての最低の生きざまである。その市場原理主義が、小泉政権の五年有余の間に、日本に全面的に輸入され、社会の非倫理化、社会的紐帯の解体、文化の俗悪化、そして人間的関係自体の崩壊をもたらした。この危機的状況の下で、宇井純を失うことの損失は大きい。痛恨の情を抑えきれない。しかし、彼は、高い志を守りつづけて、崇高な一生を送った。彼の志を継いで、日本をもっと人間的、自然的、社会的に魅力のあるものに変えてゆくために力を惜しまない若者が必ずや数多く出るに違いない。」

7. パンドラーの壺—希望を探して

このくにの人々は自然に縁り添う信仰を失いつつあり、金権にばかり服し、これをまるで神でもあるかのように拝むようになった。それが不幸の根源だ。根底にある大事な物事を探り、先真文明時代への大きな変曲点を自律的に動かなくてはならない。悲惨の繰り返しはしない。金権に服拝せずに、自然を信仰する。この国が小汚く不幸なら、それでも私たちは素のままの美しい暮らしで幸せに過ごそう。基層文化を大切に継承し、学ぶなら、真文明時代への移行はできるかもしれない。

人間の文明はますます野蛮へと退行し、その醜さは滅亡へと向かわせる。それでも美しいものを求めて、刻苦奮闘してきた人々はいた。絶望の彼方、未来の北の川 {注10} に、希望を託そう。行きつ戻りつではあるが、明らかに人間の教養（思い遣りの知性）は少しずつ高くなってきている。また、絶望のさ中でも、子供たちは新しく生まれ続けている。どんなに絶望しても、希望を探し求めるしかないではないか。

注 10：未来の北の川は P. ツランの詩の一節、ケイリー（2005）は、「期待は明日を無理強いする。希望は現在を押し広げて、未来を作る。未来の北方に。」という暗喩として引用している。

パンドラーはギリシャの神々により、人類に災いをもたらすために、地上に送り込まれた人類最初の女性である。とはいえかつては美しい地母神で、地下から恵みをもたらす豊穡の神であった。神々が彼女に決して開けてはならないと言って与えた甕を、彼女が好

奇心に負けて開けたところ、さまざまな禍が飛び出した。甕に唯一残ったのは希望で、せめて人間は希望を求めて生き続けることになってしまった (Wikipedia2018.4.5)。

期待は他者への求め、願いであって、自らが実行し、実現できることではない。希望は自らの意思で、自らが行為し、実現を求めることである。他者への期待は心充たされることが不定だが、自らの希望は心充たすためになくてはならないことだ。パンドーラーの甕に残された希望も罪なことに実現を保証するものではないが、人は希望を求めずして生きることができない。

現代を生きる人々を取り囲む虚無の暗い闇も、便利の眩い輝きも、ともに人々の視覚を奪うものだ。それでも、楽しく幸せに生きるには希望を探し続けるしかない。幸福の青い鳥は自己を取り巻く身近なところにある。家族、師友、隣人に親しみたい。さらに、自己は教養を高め、信仰を深め、意思を強めることによって、時空間を越えて広く、優れた先人にも親炙あるいは私淑して、学び、信じ、考えることはできる。自ら希望を求め、見失わない限り、人々は来世に期待せずとも、現世を何とか生きていける。カリユグ、黙示録の時代の終末、いつか来る最後の審判の日、その後の真文明の時代に向けて、先真文明時代の人間として真摯に努力した人々の自律心の遺跡を残しておきたい。

文献

ケイリー、Cayley, D. 2005. *The Rivers North of the Future, The Testament of Ivan Illich, 1926-200*, ed. by Cayley, D., House of Anansi Press, Inc., Toronto. 白井隆一郎訳 2006、生きる希望—イバン・イリイチの遺言、藤原書店。

羽仁五郎 1968、都市の論理、勁草書房。

アンリ、Henry, M. 1987、山形順洋・望月太郎訳 1990、野蛮—科学主義の独裁と文化の危機、法政大学出版局。

木俣美樹男 1970、農業と人口、人間の未来 I—一次の世代の環境について、生物科「なかよし」増刊号：2-5。www.milletimplic.net/essay/futurehuman.pdf/

木俣美樹男 2014、先真文明時代への覚書、民族植物学ノオト第7号：29-37。

木俣美樹男 2015、生きるという任意・自律的な営為を動かす心情の省察、民族植物学ノオト第8号：23-66。

ラスキン、Raskin, J. 1862、飯塚一郎・木村正身訳 2008、この最後の者にも、ごまとゆり、中央公論社。

テイラー、Taylor, G.R. 1968、渡辺格・大川節夫訳 1969、人間に未来はあるか—爆発寸前の生物学、みすず書房 {The Biological Time-bomb, Thames and Hudson, London}。

テイラー、Taylor, G.R. 1970、大川節夫訳 1971、続・人間に未来はあるか—最後の審判、みすず書房 {The Doomsday Book, Thames and Hudson, London}。

ゴッホ、Van Goch, V. 1872-1890、二見史郎編訳・圀府寺司訳 2001、ファン・ゴッホの手紙、みすず書房。

内田樹・藤山浩・宇根豊・平川克美 2018、「農業を株式会社化する」という無理—これからの農業論、家の光協会。

宇井純 1971、公害原論 I・II・III、亜紀書房。

宇沢弘文・内橋克人 2009、始まっている未来—新しい経済学は可能か、岩波書店。

山口晶 (木俣美樹男) 1971、生物科学と思想性、生物科学研究会誌 Vol. I : 1-4、静岡大学

生物科学研究会。 www.millemplific.net/essey/essey.html

山折哲雄監修 1991、世界宗教大事典、平凡社。

柳田邦男 2005、壊れる日本人—ケータイ・ネット依存症への告別、新潮社。

吉田裕 2017、日本軍兵士—アジア・太平洋戦争の現実、中央公論新社。

木俣美樹男

1948年、愛知県生まれ、東京外国語大学アジア・アフリカ言語研究所フェロー、東京学芸大学名誉教授。民族植物学および環境学習原論専攻。静岡大学理学部生物学科卒業、東京教育大学大学院農学研究科修了、農学博士（京都大学）。農科大学（インド、バンガロール）、ケント大学・王立植物園キュー（イギリス、カンタベリー／ロンドン）、ラジャバト・プラナコン大学（タイ、バンコック）ほか、国立遺伝学研究所、国立民族学博物館などで、研究・研修を行った。東京学芸大学農場（現・環境教育研究センター）を40年維持管理、自然文化誌研究会、雑穀研究会、日本環境教育学会などを創業した。

雑穀の起源と伝播の研究で日本およびユーラシア各地のフィールド調査に従事した。特に、生物文化多様性保全に関心を持ち、雑穀と野菜の在来品種の保存、調理法の調査を行ってきた。また、冒険学校・農学校などの教育実践に基づき、環境学習原論を提唱した。環境教育推進法を提案して、NPO環境文明21とともに議員立法に協力し、現在は日本国憲法に生業の自由や食料主権を明文化するように提唱している。訳書に『民族植物学』、共著に『持続可能な社会のための環境学習』など多数がある。電子書籍、調査研究などの活動はウェブサイト「生き物の文明への黙示録」に記録している。

<http://www.milletimplic.net/>

先真文明の時代への覚書

2019年12月15日 発行

著者 木俣美樹男
発行者 木俣美樹男
発行所 特定非営利法人 自然文化誌研究会 植物と人々の博物館
連絡先 kibi20kijin@yahoo.co.jp

©2019 Mikio Kimata 著者名・引用先を明記しての複製は歓迎する。